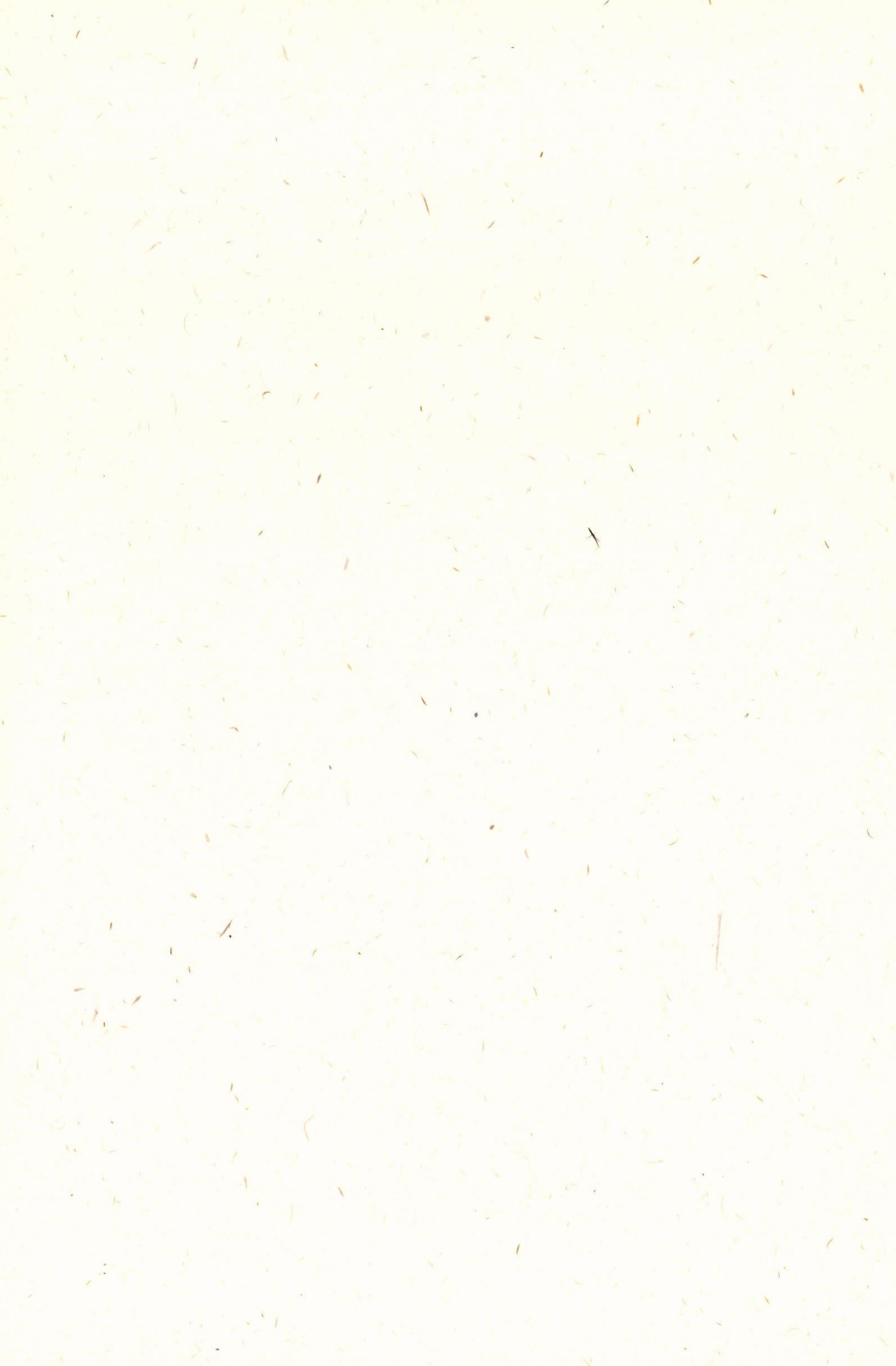


連
句

猫蓑作品集Ⅹ





序

「猫蓑作品集Ⅹ」は、平成十一年の十一月、投稿された会員の作品、総数七十九巻を収録したものである。この数は昨年のⅨ号より十巻多いが、その内訳は歌仙三十巻（昨年も同数）・源心六巻（昨年なし）・短歌行十四巻（昨年七巻）・二十韻十三巻（昨年十八巻）・半歌仙十二巻（昨年十一巻）・表合せその他二巻（昨年も同数）・百韻二巻（昨年一巻）で、猫蓑会及び会員各位のこの一年の活動の大勢を鳥瞰する事ができるであろう。

考えてみれば、平成三年に初めて第一号を出してから、まさに十年、毎年充実した作品集を刊行して来て今日に到ったことは、ひとえに会員諸氏のご協力の賜であり、ことに編集・校正を引きうけて下さった下鉢清子さん・梅田利子さん外、また、第六号以後、毎号試みた合評会を司会して纏めて下さった式田和子さんの永年のご苦勞

にお礼申し上げる次第である。

打ち明けたところ、最初はひょんなきっかけから始まったこの「猫蓑作品集」の刊行、まさか十年続こうとは思ひもかけなかったし、最近でも十年が一応のめどであろうと思ったこともあったが、今、ここにずしりと重い十冊を積みあげて一冊ずつ読み返すと、その時代の会の様子がありありと浮び上り懐しいとともに、その頃の自分の連句に対する考、変化のあとがはっきり見えて、今後の連句を考える最も貴重な資料であることに気が付いた。そして、これは会員諸氏に取っても、おそらく同じことであろう。

十年一くぎりとする考えも全く失せたわけではないが、今後どうするかについては、多くの方のご意見を聞きたいと思う。

平成十二年三月十日

東 明 雅

目次

序 東 明 雅

短歌行 秋晴れや 6

合評 8

—これからの連句とは—

東 明雅・佛淵健悟

井上鶴鳴・井上蘭石

日下悟乃・宮内志乃

司会・文責 式田和子

歌仙

茶の花や 東 明 雅 捌 20

夏木立 青 木 泉 子 捌 22

鳥の巢を 市 野 沢 弘 子 捌 24

名 月 内 田 麻 子 捌 26

秋の扇 梅 田 利 子 捌 28

蕨のこぶし 大 窪 瑞 枝 捌 30

梅雨晴や 加 藤 治 子 捌 32

和賀江の夏雲 加 藤 道 子 捌 34

小春日や 蒲 原 志 げ 子 捌 36

蝮蛇草 久 保 田 庸 子 捌 38

大津絵 倉 本 路 子 捌 40

ほうたるや 桑 原 美 津 子 捌 42

鶴引くや 上 月 淳 子 捌 44

日短か 坂 本 孝 子 捌 46

弁天橋 佐 古 英 子 捌 48

後の月 式 田 和 子 捌 50

風の滴り 杉 山 壽 子 捌 52

ふり上げし鎌 鈴 木 美 奈 子 捌 54

月の座 染 谷 佳 之 子 捌 56

野仏を 高 橋 豊 美 子 捌 58

百骸九竅 橘 文 子 捌 60

人を喰ふ 膝 送 り 62

博之・暁巳・秀樹

けんのすけ・一郎

健悟・守男・政志

水壺・英二

風の路 豊田好敏 捌 64

深川に 中田あかり 捌 66

虫しぐれ 長崎和代 捌 68

船首像 原田千町 捌 70

鎌倉開府 本田弥生 捌 72

瞑想の 文音良子 捌 74

端居かな 矢崎藍子 捌 76

月夜茸 山口美恵子 捌 78

源 心

夏初め 今宮水壺 捌 82

カフェテリア 金久保淑子 捌 84

新宿の空 篠原達子 捌 86

深秋の 副島久美子 捌 88

七夕や 山崎一恵子 捌 90

冬紅葉 東郁子 捌 92

短歌行

討入の日 青木秀樹 捌 96

お降りや 浅香宏子 捌 98

唐辛子 稻田千寿 捌 100

絲瓜垂る 木村真呂 捌 102

紅葉月 下鉢清子 捌 104

安房峠 須賀敬子 捌 106

魚水に上る 繁原敏女 捌 108

春の潮 生田目常義 捌 110

尿する猫 登坂かりん 捌 112

風見に鯨 八角澄子 捌 114

天地凍つ 原みね子 捌 116

麦嵐 膝送り 捌 118

魚乙・淑代・英二

健悟・碧

夏薊 福井直子 捌 120

春潮や 谷本守枝 捌 122

二十韻

藤かをる 秋山志世子 捌 126

遠千潟 小池啓子 捌 128

江戸村の 近藤守男 捌 130

町割絵図 佐々木有子 捌 132

短歌行 秋晴れや

秋晴れや城を挿頭^{かざし}の金華山

初茸もそへ月の出を待つ

文化の日主役は今年も抽籤に

町に行きし子便り途絶えて

渋滞^ウの助手席に読む短編集

捨てられてゐるマヌカン人形

女にはそんな齡もあるのです

男に触れぬ肌の清らに

国境のない医師団に志願して

ワイングラスに小さき陽炎

酔ひどれのランボーと住む花の頃

和布を干せば潮しぶくなり

東 明 雅

垂 石 よう子

清 水 一 與

木 村 真 呂

埜 口 恵 美

呂

與

呂

子

美

呂

美

旅人に微笑かへす野の仏

主自慢の狸汁鍋

曲屋のところで燃ゆる大囲炉裏

アバンチュールは所嫌はず

初接吻初抱擁も船の中

天神祭けふで終りに

雷去りてビルの谷間を覗く月

矢も弾も尽き窓際の席

究極の幸なんて夢の夢

楽天気質先祖代々

花の曲パイプオルガン奏でつつ

目高の学校廃校の春

塚

呂 雅 子 呂 與 子 美 雅 與 節 雅 子 呂

平成十一年十月二十五日
於 岐阜市文化センター
首尾

合 評

——これからの連句とは——

出席者（順不同）

東 明雅・佛淵 健悟・井上 鶴鳴

井上 蘭石・日下 悟乃・宮内 志乃

司会・文責・式田 和子

平成十一年十二月十一日

於 原宿 東郷神社内 水交社

司会 皆様お忙しくいらっしゃるのに、今日はありがとうございました。

ございました。では、先生からどうぞ。

明雅 皆さんお忙しいところをありがとうございました。

四、五年前から、他の結社では連句に対してどんな考え方をしておられるか、その方々が、猫蓑の作品をどう理解しておられるかをやっていたのですが、昨年、一昨年あたりから他のグループより足もとの猫蓑ではどうか、と比較的若い方を集めてやっています。

見本の作品は、十月の岐阜の国民文化祭で捌いたものです。いろいろの結社の人が混っていますが、捌いたのが私ですから、猫蓑の作品と言えるでしょう。

司会 今回は、昨年十月発行の「ねこみの通信」の質問コ

ーナーに明雅先生のお書きになっていらっしゃるのを読みますと、連句の将来や、現在の連句のあり方などがよく分かります。

先生は「今までなかったビジュアル・コミニケーションとして、コンピューターを使うけれども、それはメディアの具として自由に連句のサークルを作り、より多くの連衆と付合いをする架空の座を作るものだと分かり、成程と理解しました」と、お書きになっていらっしゃいます。「ねこみの通信」の編集長の佛淵さんもその点に着目して、パソコンネットで盛んにやっていらっしゃる、今日ご出席の方々に着目して、リーエッセーを書いていただく予定と編集後記に書いていらっしゃいます。この中には、連句はなぜ停滞しているか、その原因とか、コンピューターによってそれがどの方向にいくかなどという問題が全部含まれていると思いますので、その辺りからお願いします。

連句の読み方・書き方

健悟

今日はパソコン通信で連句をされている方々が一緒というので楽しみにやって来ました。付句を単にパソコンによる通信で送り合うというだけでなく、一巻を作り上げていくプロセス全体を通信で実現していくのは、言葉の力というものを再吟味することにもつながり、興味深いものがあります。

連句創作は座の人間関係を反映する文芸形式だと思いますが、パソコン通信によるメンバーの関わり方をベースにする創作が、実際とどう違うのか、あるいは同じなのか、捌の受け入れ方もずい分変わってくるかと思えますので、そういうようなことも確かめられればと思います。新しいメディアを使っても頭の中は保守です。

鶴鳴

パソコン連句では若い人が中心ですから、逆に古い言葉が皆、使えなくて困るということもあります。

司会

連句は連歌から派生したのですが、先ほどお話に出た「ねこみの通信」には「芭蕉の俳諧が分らなくなった時、日本人は完全にアメリカナイズされた事になる」と、昭和初期に予言したのは寺田寅彦氏だった

でしょうか」とありますが、連歌にあった教養を望んでも無理な時代になりました。連歌は難しいです。

私も岐阜の国民文化祭の連歌の部に伺いましたが、明雅先生の名著「連句入門」には連歌の言葉がたくさん入っていました、暗記していましたが、しどろもどろでした。ですから、パソコンネットの方が古い言葉を使うと分ってもらえない、というのも納得できます。

悟乃

通信の場合は、反古になる句にとっても気を遣います。何故採らないかということ云うわけで、それが勉強になっていると思います。

猫蓑の考え方をパソコンで表明するということは、どういうものかよく分かりません。この作品は、作品としては傷もみえるような気がします。

明雅

さきにのべたように、この作品は猫蓑以外の方が多く加わっておられるけれども、捌いたのは私ですから猫蓑の作品の一つとしてよいと思います。とに角、この作品は、何を目ざして、どのような方法で作ろうとしているのか、考えていただければありがたいと思います。

悟乃

僕は今日は中間テストを受けるような感じで来ました。

鶴鳴

この作品は、まず一見して猫蓑スタンダードという

印象を持ちました。「解纜」などを見ていると、少し不安定な感じを持ちますが、この作品にはそれがない。

蘭石 堂々としていて、磐石というイメージを持ちました。
明雅 そこを見抜いていただいて嬉しい。私の狙いの一つもそれです。要は近頃流行している「無心所著」の否定です。

司会 それは、私どもは猫蓑式の頭になっているから、その型におさまっていると安心するのではないでしょうか。私もよそで全部別々の結社に所属していらっしゃる方を捌かせていただいたことがあります、新しいことをやっていらっしゃる方々にはどう申上げていいかわかりませんので、エイ、ママよと、思いました。結果は猫蓑風の二十韻になりました。私は自分の頭が「猫式頭」になっているのを痛感しました。

いま、連句は短いが良いという風潮がありますが、短ければ良い、というものではないと思います。短い型なら、昔から三ッ物もあり、表合せもあるわけですから。

これで読み方は一応クリアしたとして、次は書き方へいっていただきたいと思います。
パソコンは横書きですからそれについて

健悟

パソコン通信では文章は横書きで流れていきますから、ノートする時も連句を横書きにすることに違和感を感じない人が結構いますね。私の場合、通信はやっていても、ノートするとなると、日本語の韻文は縦書きでなくちゃというこだわりはまだあります。横書きに平気になることで発想がもっと柔軟になるものかどうか、ここらはよくわかりません。

蘭石

縦書き、横書きの違いで発想に変化が見られるということは無いように感じますが、いかがなものでしょうか。私個人としては、仕事のときは横書きですので、縦書きにすることで楽しい時間を満喫する、いわばハレとケのような作用になります。ハレはもちろん縦書きの方です。

司会

木村真呂さんは中国語も横書きになっているとおっしゃいますが、縦書きでないと、つづけ文字が書けません。短冊もどうなりますでしょうか。

猫蓑流

健悟

猫蓑流とか猫蓑風とかいう言い方を結社の外の方、また自分達自身もしていますが、安心して読めるのだけれど、ちょっと型にはまっているというような、あ

まり肯定的でないニュアンスもあるように思います。
猫養流の定石をどう打ち破って行くか、私にはこのテーマはいつも楽しい挑戦です。

蘭石 作品にむかうには、その当りをさぐれば良いと思います。
ます。

明雅 この作品は、男三人、女性三人です。猫養の人は一人しか入っていません。

以前は「女流俳人」といわれていて、別の扱いを受けていましたが、いまは女性の方が多くなり、男性は「男流俳人」とくくられるような情勢になっているようです。それから考えると、男女、三人ずつはいい組合せと思います。連句でも、さしあたり猫養などは圧倒的に女性有勢ですね。

志乃 新しい人を連句に誘う場合、難しいことを言いますと入ってきませんから、なんでもいいのよ、みたいなことをいいます。でも、捌きをするときには式目から頭から離れないで、厳しかったりしますね。自分の知っている解釈がいちばん正しいと思います。連句は大人の文芸ですから、自分の枠をしっかり持ちながら、他の枠とも重なり合っていかなければならないと思います。

鶴鳴 学生の頃ですが、小説や自由詩を書いていて、横書きと縦書きとでは文体が変わるということを経験しま

した。しかし、連句についてはそれはないように思います。パソコンで巻く場合も、一座の場合も、やっている内容はほとんど変わりません。ただ一座するあの雰囲気はパソコン通信では模倣するにとどまるころが残念なところですね。

司会 猫養ではしっかり見せ場をたたき込まれていますので、それをきちんとしないと気持が悪いんですね。

蘭石 猫養で連句の勉強をしましたから、猫養流至上主義です。納得しないで拾った句は必ず後悔します
ので。

明雅 自他場をきちんと現代連句に導入したのは私という事になっており、またその通りですが、その為、最初私は皆から、憎まれたり、悪口を言われたりしたものでした。でも今では大体、現代連句に定着しているようです。

司会 たしか千葉の大会のときの講演で自・他・場を図式でおしめしになりました。それがとても良いということとで、連句協会の会報にのせるから書いてほしいと頼まれました。いま、A・C・Cでもそれと同じことをお習いしております。それまでの三冊子や、附合てびき蔓をわかりやすくされました。

それから、この方式がよいといって、使うところも

あり反対に、自・他・場の猫藪といわれ、毛嫌いされることもあります。連句一巻の変化をつけるには、この方法が一番良いキーワードではないかと思っております。

では、作品に入りたいと思いますが、メール式の観賞はどんなものか知りたいと思います。

志乃 自・他・場・という考え方は付句を作るとき、とてもありがたいヒントになっています。通信で慣れた横書きを実作の座でも使うとき、鉛筆で書いた前の部分を汚さない利点がありますね。パソコン通信連句で、日数をかけて巻く場合、連衆全員が自句を含めた候補句一句一句に対して吟味鑑賞文を提示する方法をとることがあって、大変に興味深く思います。捌きはそういった連中の意向を知ったうえで、治定理由や反故理由を明らかにします。付けに対する他の方の考え方も知ることができまし、ディベートの面白さもあり、パソコン連句の醍醐味と思います。

それに、パソコンの場合は早出しです。良い点は、書いたところを汚しません。連句のパソコンで縦の表示のものもあります。

悟乃 席でやるのと、パソコンとは情報量が違います。それに言葉をつきつめますから、掘下げの訓練にはな

ります。その主な理由は、電話代がかさむから、全体的に早出しです。

蘭石 連句の座には独特の雰囲気がありますよね。席について、季寄せを操っているうちに自然と連句頭になるような……。パソコンの場合は一人ですから、作る状況に自分自身をもっていけないことはよくあります。一直をするにも相当な覚悟がいります。一句のテ・ニ・ハを一ついじただけで、猛烈にもめたりします。メンバーにもありますが、通信の世界では平等ということが前提となっておりますので、捌きという概念が受け入れられにくいのかもしれません。

発句 秋晴れや城を挿頭の金華山

健悟 金華山の上にちょこんと乗った岐阜城は、まさに「城を挿頭に」という形容がぴったりです。土地誉めのご挨拶ですね。

悟乃 この発句は少し四角ばっているかも。

蘭石 私は素晴らしいと思いました。

悟乃 挿頭にはなんとなく揺れ動く柔らかなイメージがあります。曾良の「卯の花をかざしに関の晴着かな」でしたか。そのため、城はちょっと硬いイメージがあり

ますが、見事な蕉風の挨拶句であると思いました。

脇 初茸もそへ月の出を待つ

悟乃 脇の「初茸も」の「も」は他の物、芒や団子を連想させます。初茸が添えものになっているのが惜しい気分がします。この場合「初茸を」とやると、「身柄」が出過ぎるのでしょうか。

第三 文化の日主役は今年も抽籤に

鶴鳴 五つ文字の口伝は行っていないですね。

注（脇が韻字留めでない場合、第三の上五は漢字を並べる、ということ）

蘭石 この第三は居心地が悪いです。発句立派、脇が立派でない

四句目 町に行きし子便り途絶えて

悟乃 この四句目に対して、猫蓑は式目に対して厳しい。

いい四句目と思いました。

蘭石 便りが途絶えてしまうのは寂しい気がします。とて

も親不孝な感じがしてしまうのは自分に重ねあわせてしまうせいなのかもしれませんね。

健悟

四句目の「町に行きし子便り途絶えて」に、述懐調で表にふさわしくない付ではというご意見ですが、私は別に構わないように思います。前後の句で気分はずい分ふき上げられているように思います。少しでもさみしいネガティブな要素があれば急いで排除するというのではなく、もう少し引きつけて撃つと言いますか、後の付にお任せしてもいいと思うんですね。そういう意味でこの四句目は、いわゆる猫蓑流から抜けていて面白いです。それと短歌行ですから、通常の四句目と同じには考えられないですね。

蘭石 なる程。

悟乃

四句目の「町」からは、親が村に住んでいるように思えます。村と町は便りが途絶える程の距離は感じられませんが、市街地の「街」にするのが良いと思います。

志乃

第三に戻って恐縮です。短句の場合下四、三は座りが悪いと良く言われますが、長句の中七の字余りはどうでしょう。ことに第三の中八というのは落ち着きに欠けるように思います。助詞「は」を除いた場合句意は変わりますか？

蘭石 居心地が悪いように感じたのは、中八のせいだった

んですね。第三が五七五になると、だいぶ印象が変
って来ますね。

司会 では裏に入りましょう。

男流の目 女流の目

渋滞の助手席に読む短編集

悟乃 うまいですね。手練であることを感じます。

蘭石 裏の運びは素晴らしいですね。一句一句に力がこもっ
ていて、丁々発止の付け合いというのはこういうもの
かと思いました。

拾てられているマヌカン人形

悟乃 マヌカンと人形には重複感があります。

志乃 これで推理小説っぽくなりました。前句を生かし、
付け句も生きて良い味わいと思います。

女にはそんな齢もあるのです。

悟乃 とてもいいです。口語体ですから目立ちます。

男に触れぬ肌の清らに

鶴鳴 うーんいいですね。そうすると、男はそんなに汚な

いものでしょうか。

健悟 「男に触れぬ肌の清らに」は男性の句でしょうか。

言いにくいことを言いましたね。「恋で磨かれること
だつてあるでしょ」と来ますからね。お互いの偏見を
上手に巻き込んでいけるとところが連句の奥深さという
ところでしょうか。

志乃 汚れちまったらどうなるの？

蘭石 男に触れぬ——は男に頼らぬという若い感覚で、屈
折さがよく出ています。このあたりの感じが昂揚感が
あって素晴らしいと思います。

ワイングラスに小さき陽炎

悟乃 男に／医師団に／ワイングラスに／の「に」が気に

なりました。

蘭石 この句はとても詩情がありますね。

酔ひどれのランボーと住む花の頃

志乃

この句はよくわかりません。マッチョマン・ランボーか、詩人ランボーかによって全くちがう物語になりますね。

鶴鳴

これはシルベスタスタロンをイメージしました。

蘭石

ランボーのように住みなす、と読みました。この句好きです。

志乃

ランボーの詩才にのめり込む山に住む詩人と読みましたが。

明雅

ランボーと一緒に住んでいたのは男。心酔した人はベルレーヌで、一緒に住んだのです。

健悟

「酔ひどれのランボーと住む花の頃」は、ベルレーヌの視点に立って詠んでいると思いますが、あのベルレーヌが人のことを「酔ひどれ」なんて言うところが何だかおかしい。どんなに身勝手であっても、一番苦労しているのは自分である、と認めてしまえるのが人情ですね。もっとも、ベルレーヌはランボーの健康さに大層傷つけられたとは言えますが、「ランボーと」の「と」は利いてますね。

蘭石

ワイングラスに小さき陽炎は、国境のない、広い景、

こちらは小さい句とも、大きい句とも読めるのが面白いです。砂漠を背景に乾杯している情景を思い浮かべました。

和布を干せば潮しぶくなり

鶴鳴

七・八はよい付合いで、和布がよかった。

健悟

「和布を干せば潮しぶくなり」は、前句の屈折した人間模様を引きずらない、小気味よいあしらいですね。

司会

ナオに入りますが、折立はやさしいようで難かしいものです。皆さん、どのように気をつけていらっしやいますか。

ナオ

旅人に微笑かへす野の仏

蘭石

発句・脇の世界にイメージが重なるような感じがしました。

主自慢の狸汁鍋

健悟

ウラから続いているようだとのことですが、ローカルはローカルですけど、でも風の匂いが違うなあとい

う感じで、特に気になりませんが。田舎が続いてもよいと思うし、狸汁にてんごうがあつて、この付け合いはいいと思います。外から内へ入ったし。

曲屋のとろろ燃ゆる大囲炉裏

蘭石

ナオなので読み手にはついつい、もっともつとーという期待をしてしまうのでしょうか。一句一句は面白い題材の句ですね。

アバンチュールは所嫌はず

健悟

「アバンチュールは所嫌はず」ですが、アバンチュールなどと言うと、何か中高年風な感じしませんかね。偏見ですかね。こういうもやもやとした精神性は現代若者の風格とは縁遠いもののように感じます。若いと詠めないものというものはありますね。

悟乃

所嫌はずで、恋が出物腫物と一緒にになったようですね。おかしいですね。

蘭石

大変品の良い恋句だと思いました。自然に対して感動することは難かしい日常ですから、若い人達にとつてもわかりやすい題材は恋なのではないでしょうか。

初接吻初抱擁も船の中

悟乃

抱擁の後に接吻があるべきと思います。

蘭石

初の子が脇にあるのが気になります。

天神祭けふで終りに

悟乃

船から天神祭を出したのはうまいですね。

雷去りてビルの谷間を覗く月

矢も弾も尽き窓際の席

悟乃

船から天神祭を出したのはうまいですね。天神から雷へ転じたのもうまいですが、ビルの谷間を覗くのは、似た句がよくあります。

蘭石

矢も弾も尽きというのは良い句ですね。こんなに力強い窓際族ならきつとこの先も元気なのだろうと嬉しくなるような句です。

志乃

展開の潔い月で好ましく思います。ナウの中ほどからは心地よいリズムで「色あい」が感じ取れます。ワ

インの赤、花の桜色、潮の水色、言われた野の仏の句からは茶色、囲炉裏からは橙色といった具合です。見える者が視覚に頼った句を多く作ってしまうのはなりゆきですが、パソコン連句では、海野海砂氏の提案で「視覚」を縛りにして歌仙を巻いたこともあります。視覚障害者の近くで暮らすものとして感動した覚えがあります。

悟乃 三句がらみか、とも思うが、雷でごちゃごちゃしたのを一掃したので、そのバランス感覚のよさに敬意を表しますし、景をよくしぼってあるのでうまいです。

上七で戦闘かと思わせて、リストラに落したのはうまいです。

志乃 いさぎよいですね。

司会 それではナウに入りましょう。

究極の幸なんて夢の夢

オ
楽天気質先祖代々

健悟 楽天と天神は天の字が打越しました。

明雅 それは三句去りですから問題なしです。

花の曲パイプオルガン奏でつつ

悟乃 花の曲は根無しだが、オルガンとか入れると花が霞

むようにも思えます。

司会 根なしの花となるでしょうが、カタイこといわない

で、オルガンで浮き立たせれば、ハラハラ散る景も浮ぶではありませんか。

目高の学校廃校の春

蘭石

良い挙句ですね。句の詩情とは別に面白と感じたのは、発句と対句のような構造になっているところですね。

発句の「秋・頭・城」に対して「春・目・学校」：力がこもっていると思いました。

志乃

目高もいない川が増えましたが、瀬戸大橋のたもとのあたりに、水より多いほど目高のいる川を見ました。ちょっとマスコミからはずれば、まだ自然との共存は可能なのですね。

明雅

連句は、世態人情諷交詩をストレートに出せばいいかという、そんなに単純なものではありません。連句に現代詩が流れ込んで来ていますが、取り入れなが

らやってみては…と思います。

蘭石

席に出て、情報を察するというのがパソコンではできません。でも、伝統文芸ですから、若い方に多いに学んでほしいと思います。どうせ私なんて、と逃げないでやってみて下さい。

明雅

今日は一番みのりのある会でした。自分の言葉で批評して下さってよかったと思いました。連句に対する理念がすぐ伝わって来たとし、連句を愛して下さっているのがよく分かってうれしかったです。貴重な時間をありがとうございました。

ホームページを！

悟乃

通信で連句をやっていると、いろんな質問にぶつかります。猫蓑会の公式HPがあれば、遠隔地の方や教室に出たくとも出られない初心の方に便利と思います。私達、通信の仲間が下働きのお手伝い程度はできると思います。

健悟

連句を定義されての明雅先生の「世態人情諷交詩」という言葉は大変腑に落ちますし、連衆との関わり、作品の目指すもの、そして自分の座り方のようなものを考える時のポイントになります。最近の連句作品に

司会

は、文芸的爪先立ちとでもいいいますか、詩が「高止り」しているのをよく見かけます。言葉が世俗にまみれてそこから出て行かなければ詩になりませんが、もっと世俗を共成的に取材するバイタリティーも必要ではないかなと思います。これは私自身の反省です。疲れてくると、人間の方に歩いて行かないですむような理論を構築してしまいますから……。

今日は意見が白熱しました。若い方が、いろいろ挑戦をしてみようという意欲をお出しになり、ホームページにチャレンジして下さるとおっしゃいます。どうぞがんばって下さいませ。ありがとうございました。

◇
歌
仙
◇

茶の花や

東
明雅
捌

茶の花や昭和も既に一昔

吹き抜けて行く町の風

遠眼鏡西へ東へ巡らせて

居留守遣ひも堂に入つたる

月明の広告取りに励むらん

拝み太郎が振り上げる斧

祭には紀州名物さんま鮓

若いお内儀のよく通る声

おいらんのやうな沓はきヒモ連れて

横文字もある署名簿の嵩

仏法僧山を守るを生き甲斐に

苔の清水に漱ぐ残月

髭面がにっと見交す窯開き

穂擦れの筆を師弟相伝

痛風をダイエットして治したり

スーツケースに残されたジン

妖精の花に浮かれる四重奏

蜂に刺されて覚めるあけぼの

東 坂 日 今 佛
明 孝 本 高 宮 渕
雅 子 二 英 水 健

雅 子 二 壺 悟 雅 孝 英 壺 悟 雅 孝 英 壺 悟 雅 孝 英 壺 悟 雅 孝 英

おのがじし杖取り出づる遍路宿

かけられたままあやとりの橋

難民は救へば救ふほどに増え

アラブの牝馬王の貢に

ベリダンズシェヘラザードに蕩さるる

初湯殿には笑ひいっぱい

仲のよき媼翁の連頭巾

鰻頭つまむ朱の入りし墓

竹人形うしろ姿が泣いてゐる

鮎も鱗も落ちてゆく頃

さねかづらひろげて看板講師なり

三日月といふ仇名いたたく

引っぱらず技に試合を勝ち進み

情の厚きご当地の夏

志野鉢に民田茄子の浅漬も

ものの命をデジカメで撮る

花咲けばひと日忘るる宮仕へ

ここもかげろふそこもかげろふ

平成十一年十一月二十二日 首尾
於 青山NHK南寮

壺 英 悟 雅 孝 英 壺 悟 雅 孝 英 壺 悟 雅 孝 雅 悟 壺

夏木立

青木 泉子 捌

玉砂利を踏む閑かさや夏木立

蜻蛉生るる池の継橋

冷しそば上手に箸をすべらせて

テープリビート寄席の出囃

主待つセダンの並ぶ塀の月

ばさりと落ちて割れし実石榴

やや寒の厨に猫の声きこゆ

初フライトでちよつと緊張

どなたにもアパートの鍵貸しますよ

僧衣脱ぎすてひしと抱擁

根津谷中本郷あたり坂多く

有明月に励む寒取

鬼やらひホームステイでもてなしぬ

アルミサッシにハンゲルの文字

外交は虚実皮膜の回顧録

行進曲の大好きな子等

花浴びてバトントワラー先導す

またたきそめしひとつ春星

青木 泉子
豊田 好敏
大窪 瑞枝
八代 澄子
八角 澄子
久保田 庸子
青木 泉子

庸樹 敏樹 枝 媛 枝 媛 樹 澄 枝 庸

釣^ナりし罇印をつけて放しやり

原住民は沙金篩へる

盆莫^ナ塵にひとり勝ちする若頭

銭湯やめて建てるマンション

虫干しの谷崎源氏拾ひ読み

相^{アハ}とらへし塗籠の闇

ざんげ台愛の罪業また重ね

コンピュータの狂ふ百年

Z旗を掲げ元帥はるかなり

不定愁訴をはらふ体操

到来のロマネコンティ月の宴

誰にもやらぬ秋茄子の瑠璃

山^{ナカ}近き落穂に鳥の群がりて

記念スタンプ次々に出る

王羲之を教本にして書の稽古

雪解けの風頬にうれしき

水脈を引くカヌーに花の散りかかり

新聞配達暮れ遅き道

平成十一年六月十六日 首尾

於 東郷神社 和楽殿

樹 泉 澄 枝 嫺 樹 澄 敏 嫺 庸 枝 庸 枝 嫺 樹 敏 澄 敏

牛蛙殿様蛙都知事選すゐ

寺の宝は百鬼夜行図

敷金をふたあつ入れて四階に

あの指切りは今も有効

マシユマロの様な乳房を弄び

陶枕はづし喘ぐ楊貴妃

蜘蛛の囀にからめとられて埒もなし

御諏訪太鼓の響く湖の面

公宮のケア付きホーム満杯に

襁褓してゐるくりからもんもん

裏表月の鏡もみつくして

猫へみやげのまたたびを買ひネ

文化祭落研のとり盛り上がりち

無といふものの有るが不可思議

キロキロとヘクトデカけたメートルが

白豚黒と偽って売る

花万朵生き方少しづつ変り

宇宙船よりうらかな声

平成十一年三月十二日 首尾
於 俳句文学館

路 弘 碧 路 町 枝 路 枝 町 路 同 碧 町 路 町 枝 町 路

名 月

内田 麻子 捌

市野沢弘子氏句集『点景』出版を祝す
名月を西湖に返し寝ねにけり

夢の中まで香る秋蘭

初狽の犬先立てて登るらん

ポケット多きライフジャケット

ビーカーに観測点の水を採り

万緑を縫ひ銀輪の列

蝉^{せみ}声の降るが如くに渡岸寺

熱き番茶に添へるかきもち

琴糸を紡ぐ手白くしなやかに

セピアの写真秘めしロケット

取り替の利かぬ男は塀の中

だいだらぼっち北空に去り

酌み交す鮫鰯鍋に寒の月

神の留守なり地震恐るる

事も無しノストラダムス大予言

一直線に伸びる鉄塔

樹木医師加奈陀にも花咲かせんと

フェルト靴の児歩むうららか

市野沢弘子	内田麻子	上月淳子	橘文子	五味蓉子	松本碧	須田智恵	今村すま子	高瀬美保	椿紀子	淳ま	蓉	碧	保	文	淳
-------	------	------	-----	------	-----	------	-------	------	-----	----	---	---	---	---	---

次々に家族の離れしじみ汁ナホ

公園あたり地べたりあん増ゆ

ニニロツソトランペットの聴こえ来て

ダビンチの馬遂に復活

遠距離の恋はDOKOMOに助けられ

鎖骨に頬を埋めてみたい

忍従の妻にも切れる時がある

兵隊の傷痛む底冷

君が代を歌ふ歌はぬ自由にて

版画に太き墨の線出す

部分蝕果てて円かな月宮殿

弥生の米の穂波七色

囃籠仕掛けスリラー本を読むナウ

旅芸人の小型トラック

山裾の家々あかりつき初めぬ

卒業式の答辞練習

花衣染めて仕立てて待つ明日

点景のごと揚がる大風

山口みづゑ

弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧 弘文保碧

平成十一年九月二十三日 首尾
於 梶が谷房連庵

オオ
自白連合宰相の掌に蠅生まれ

また塗り替へるビルの看板

哲学書二束三文売り払ひ

埃及展の列のしんがり

盗っ人の裔と出自を明かされて

親指出せば小指突き出す

鍋よりも恋にやけどの四畳半

遠ざかり行く寒行の鉦

応募する橋のデザイン完成す

あぶれた猿に名を付けてやり

風狂の宴と洒落込む月の友

亡き母現るる荻叢の蔭

オウ
東欧の旅で求めし胡桃割

総領事にて宮仕へ終へ

フェアウェイナイスショットに拍手湧き

禁煙の禁破る一服

地に座して花と語らん吉野山

あれぞ貌鳥ふいに翔び立つ

平成十一年八月三十一日 首尾
於 俳句文学館

玲 利 文 壺 同 枝 町 同 玲 文 枝 町 壺 玲 文 町 壺 枝

蕨のこぶし

大窪 瑞枝 捌

雨微か蕨のこぶしほどきけり

土の香著き川ぞひの道

内裏雛瓔珞の揺れ楽しみて

レーズンサンドさくと食まるる

月も入れアンテナシヨップよく流行り

兄に習ひし鳩を吹きつつ

初^ッ狽に鍛へし犬の綱を解き

鍬にも慣れて開拓の医者

眩しさはピリカメノコの皓き肌

閨の飾りの手機織り上げ

友禅に包む二本の大吟醸

李白誘ふ水の凍月

妖かしは今も棲むとふ楼観に

取材カメラの不意に重たく

知事候補タカ派の旗も翩翩と

動く歩道に逆さまに乗り

時よ止まれ二十世紀を散る花に

夢まどかなり羽化を待つ蝶

大窪 井上 篠原 鈴木 日高 日下 瑞蘭 慎達 悟

枝 石 子 二 玲 乃 子 二 乃 子 乃 子 石 玲 乃 二 玲 乃 石 乃 二

真打の名も新しく春灯ナオ

カウンター洋食今日もシチューで

辛口に過ぎる冗談聞き流し

巨額の損の後の撤退

煌々とカジノ空間無機質に

ダークスーツをまとふ銃身

彫り物の薔薇が殺した大年増

蠅を払って下げるお供へ

潮もよし管絃祭の賑やかに

インターネットで世界遺産を

ロンドン塔くはへ煙草に弓の月

地下鉄出口寄せる黄落

小鰭鯔オウ食めば余命も延ぶるなり

番ひの朱鷺の育つ喜び

腕白の秘密の基地は里の山

ミニ美術館午後はレクチャー

花の窓あなたの好きなシャンソンは

空の青さを映す弥生野

平成十一年三月二十二日 首尾
於 緑華亭

乃 枝 子 乃 二 石 玲 二 石 子 同 石 乃 子 石 子 二 乃

梅雨晴や

加藤 治子 捌

梅雨晴や最澄ゆかりの龍興寺

佇み居れば響く筒鳥

投函の封筒に十円貼り足して

陶の表札新築の家

カーテンの中の幸せ月明り

夜食のピザも案外の味

紅葉狩誘ひの電話ながながと

地域起こしに募るアイディア

占ひにラブチャンスあり六十歳

愛し愛され騙し騙され

政治家の話割り引く人の常

清貧の文字遠き河豚鍋

白壁に凍月細し角館

新聞配るバイク軽やか

学生のお喋りつづく始発駅

厚き靴履きちよつと気取って

花筏解けて入江の波となり

子猫の耳は淡き紅

原

加藤 治子
後藤 東潮
谷本 守枝
繁原 敏女

みね子

加藤 治子 潮 枝 女 同 枝 女 枝 女 治 女 治 女 女 女

春火鉢客の座蒲団ならべ置く

「あれ」「これ」「それ」で話し通じる

臨界の被爆恐れる声高し

渾名は博士ゐり飼ふ孫

夏瘦の肋まさぐる聴診器

ゆるゆる流るFAXの紙

映画はねそつと寄り添ひ黙のまま

洗礼のごと受ける口付け

華やかにクリスマスツリー飾られて

じゃんけんぽんに負けて泣きべそ

月煌々祖父余念なき菊手入れ

ばらばらと落つ銀杏の音

喪服には喪服の歩みつづれさせ

セーヌの川に流す想ひ出

食料と古本なども買ひ込んで

母の写せる残雪の嶺

花の宴自慢の喉を披露して

風の戯るふらここの影

女 枝 治 女 同 治 女 枝 治 女 枝 治 女 枝 治 女 枝 治

平成十一年七月二十七日 首尾
於 桜花学園大学

和賀江の夏雲

加藤 道子 捌

実朝も和賀江に見しか夏の雲

卯浪さ浪のよせる石積

ペイロンの優勝杯は床の間に

おもちゃの太刀を振りて遊ぶ児

蜂の仔を馳走と供す後の月

機拭きあげて今年絹掛く

出し抜けと言ふ間もありて威銃

こんなところでご無体なこと

遣伝子は美女が生れるはずなのに

第四楽章ロンドアレグロ

カーチェイス高速道をパトカーと

銀行窓口まに合はぬ刻

神の留守月も斜めに朱の鳥居

大川端で交す鱈酒

地域猫世話はやっぱりバーのママ

何でもかでもレスキューを呼び

深吉野の花に疲れて葛湯欲り

きしみかすかに揺るるふらここ

鈴木美奈子
加藤道子
蒲原志げ子
田村満子
池田やす子
橋野代子
川名将義

げ義奈義代
げ義奈義代
満す義代

晩節^{ナホ}を少し汚して春の泥

賭麻雀のつきもどこかへ

掃き寄せる木屑の匂ふ木工場

インターネット通販もあり

オスカルに似たる男と巴里祭

肝もつぶれる夜濯のあと

終着の駅に北ぐち南ぐち

公約目玉叫ぶ候補者

鯛焼のしっぱの餡が好きなのよ

大膳職は買ひ出しの日々

月の下口伝で習ふ笙の曲

柿のたわわに実る村里

牧閉^{ナウ}す牛馬も帰し水の桶

家の中にはいつも母さん

論語よみ論語しらずとそしられて

初鶯のけんめいに啼く

幸せの花をたづねて二人旅

げんげ輪飾り懸ける野仏

平成十一年五月五日 首尾
於 鎌倉おんめ様

す 道 義 げ す 満 義 満 げ 代 奈 代 満 奈 義 す げ す

小春日や

蒲原志げ子 捌

小春日や布袋微笑む洞の内

こぼるるばかり万両の朱

甘露煮の寒鮎のてりあざやかに

指を折りつつ軽きハミング

当落の稿を囲みて思案月

相撲番付送るFAX

アルプスを振り返りては牧閑さず

木靴の少女輪を作りゐて

触れたくて触れられないのまだ十五

バイクでならばしかと抱き付く

自販機もウオン硬貨に身を守り

剥いても剥いても婆の薤

月かげの蜘蛛の糸にもすがりたし

正直正ちゃん苺どうどす

チャンバラは太秦育ちカムバック

切手忘れて付箋付く便

今年こそ花の盛りに尋ね来よ

流す盃とめて一献

加藤道子
蒲原志げ子
式田和子
橘文子
橘野代々子
本田弥生

文道生和道代生和道代生和道代生和

鶯^{ナオ}の高音程よく定まりて

答につまる国語担任

元号と紀元西暦ごちゃまぜに

介護申請汗も涙も

幽霊の掌の下向きは決まりごと

チビはノッポに飛び付いてキス

浮気にはこの簪で刺しまする

好きなものから箸つける癖

信楽の里に並んだ大狸

首に幾重も旅の御祝儀

階に潮騒を聞く月の宮

運動会の準備了へたる

家持忌町^{ナウ}をあげての歌づくり

万葉仮名はワープロに無し

考古学シャベルに託す過去の夢

まことしやかに啖阿売香具師

これぞ花西に東に世界一

ネーブルの臍みんな上向く

平成十一年十二月一日 首尾

於 鎌倉おんめ様

文 げ 道 代 生 和 代 文 生 文 代 和 げ 和 道 げ 代 文

蝮蛇草

久保田庸子 捌

沼辺りに揺らぐ影なき蝮蛇草

遠ざかりゆく遠足の子等

春陰の書斎に本を積み上げて

スカラベ遊ばすころと掌

双発機翼きらめく良夜なり

新米おにぎり繁昌の店

靴の紐結び直して秋^ッ遍路

話の腰を折るなコリーよ

フェミニスト気取ってゐるが男好き

寄り添ふ姿態も芝居がかりし

月光ゲに匂ひの淡し薰衣香

細くなりたる青鳩の声

戦争の道具となりて避難民

もてはやされしMOF担の頃

呑めぬ酒すめられては呑んだ振り

何処ともなく津軽じょんがら

舞ひ舞ひて宙に帰るか花吹雪

四大五常に遊ぶ荷風忌

久保田 庸子

副島 久美子

金久保 淑子

上月 淳子

峯田 政志

美 淳

志 淳

志 淳

淑 淳

美 淑

美 淑

淑 志

志 淑

志 淑

淑 淳

淑 淳

淑 淳

志 淳

採^ヌりて来し浅蜷厨に汐を上げ

曾孫の名前間違へる婆

町立の芸術劇場がらんどう

C・Tスキャン脳の断面

がっちりトラガススクラムどよめけり

日記果てたるよしなしの事

ねんごろに閨の作法を娘に訓し

キングサイズのベッド自在に

時差ぼけの衣服独りにやにやす

樺並木が都心貫く

有明けの月に濡れたる歩道橋

踊浴衣にブランドの帯

遠嶺^チのはぐれ雁指さして

先づ計報欄読む癖がつき

ダイパックしよって熟年少女めき

たまの料理はレシピ通りに

飯の世の人を信じて花の下

夢か現か蝶の群れ飛ぶ

平成十一年四月二十八日 首尾
於 源心庵

淑 庸 美 淑 美 同 志 同 淑 美 庸 志 美 淳 淑 美 志 淳

大津絵

倉本 路子 捌

熱燭や大津絵の鬼三味を抱き

家を揺って過ぐる風

ゲレンデにジャンプ回転習ふらん

キャンセル待ちに並ぶ空港

見上ぐればあかときの月傾きて

ひらきはじめし垣の朝顔

白秋忌雀の遊ぶ運河べり

ひそかに渡すむにやむにやの文

齡の差を世紀と共にとびこえる

トランポリンのバネがゆるんだ

ニューヨーク株価の行方惧れつつ

頭の蠅を払ふ割箸

月高し祭の山車に子ののぼり

遠き嶺より雨兆しくる

美しき名を貰ひたるお饅頭

夢千代日記繰り返し読む

百年をつきし杖の花仰ぐ

牛のあくびののどらかな牧

倉本 路子
今宮 水壺
登坂 かりん
長崎 和代
竹田 登代子
染谷 佳子
島村 暁巳
山本 千代子
佐々木 有子

有 壺 人 千 代 之 壺 同 巳

雛^{ナギ}流し旅の鞆は石に置き

方違へとて西へ東へ

交番で何を訊いても分からない

仮面をとれば下も妖怪

好き嫌ひ姦しみんな女偏

鎌鼬だと白き脛見す

姉婿の味は河豚より危くて

当り玉出るくじびきの箱

巫女さんの袴の襷の直線に

力を抜いて楽に生きよう

方丈記徒然草の月尋ね

むかし世阿弥の見たる秋潮

そぞろ寒^{サウ}ノートパソコン持て余し

リストラ族の起すベンチャー

二四が八二八十六あと知らぬ

いつも漏れてる水道の栓

飛花落花街騒遠く北の丸

奉仕団にて緑摘む人

平成十一年十二月七日 首尾
於 新宿大久保地域センター

已路已壺ん代登已代千有之已登千壺代之

病床にうつらうつらと白昼夢^ナ

箸転んだと笑ふ芸子と

ハーレーで出勤ホテルの支配人

ラトル・スネーク彫りし長靴

蒜をしこたま入れた五目飯

お化そろそろ身支度のころ

毎朝をちがふ彼氏に起される

ジゴロの武器は口説とマスク

大切の臍くり正に臍にまき

おけらが鳴けば蚯蚓鳴くなり

月照らす屍衛兵に佇ちし日よ

孫国体で選手宣誓

名^ナも知らぬ鳥の来てゐる眼鏡橋

雪舞へる川さざれ波立つ

朝市に野菜乾物商ひて

ホームページを開く立春

花しづか丸太の椅子に老二人

合唱すれば山笑ふかに

平成十一年六月十六日

於 東郷神社 和楽殿

利 津 達 利 淳 代 達 淳 雅 達 淳 利 達 雅 代 達 代 雅

鶴引くや

上月 淳子 捌

鶴引くやためらひの後一筋に

見はるかす野の土匂ふ頃

豆雛ピアノの上に飾るらん

ピアスお揃ひ姉と妹

宵月の濃くなりそめし軒の端

入幕決まる秋の番付

升酒の香の爽やかに手打式

試着ルームにバッグ忘れる

ドール夫人今や女が売り時と

博物館に古き恋文

たもとほる哲学の道小雨降り

苦き珈琲啜る凍月

ともかくも絵筆を取りしちゃんちゃんこ

CMに出て稼ぐぶち犬

銭湯で外人と背を流し合ひ

もてなし料理いつもバエリヤ

大花火しだれて競ふ信濃川

掌に遊ばせるとけなき蟹

梅 今 百 坂 橘 上
田 宮 武 本 文 月
利 水 冬 孝 淳

壺 孝 利 乃 孝 壺 文 乃 孝 利 文 孝 子 壺 乃 子 子 子

勞作^{ナサ}の陛下の図鑑ひとときて

けふ日利息は零に等しき

串刺しの団子三ヶに致します

鳥居をくぐり稲荷拜んで

爺さまの仮病使ひは常の事

顔見世狂言立見連中

添ひ臥のそびら妖しき女郎蜘蛛

共に落ちなん深き奈落に

落書の上に落書五番街

夢は叶ふよギター鳴らせば

峠路に望月仰ぐ旅の果

木の实降り来る朽ちし吊橋

棟上げ^すの鯛の反り身と新米と

サンドマン来ると寝ぬ子おどかす

本当のことを喋って爪はじき

手製の茶杓お薄いっ服

銘木の枝先までも花満ちて

糸張り直す婆羅門の風

平成十一年三月十二日 首尾
於 俳句文学館

利 淳 文 壺 淳 孝 文 同 乃 孝 壺 孝 文 壺 文 利 孝 利

日短か

坂本孝子捌

地下街を出るや濃東日短か

垣にこぼるる白き山茶花

鯛を焼く遠火の強火ねんごろに

ちよつと頑固な肩の逞し

打球音まだ響きをり月の暈

沖に霧笛の船のうごかず

濁り酒邪宗の門人香を放ち

媚薬を販ぐ赤鼻の僧

御嫁下の姫に持たせるあぶな絵図

いくら待っても開かぬ踏切

勤務明け大夕焼けに呑みこまれ

そも定説は誰が定めし

遣伝子の28番解かれけり

靴間違へた湯やの下駄箱

砂山を辿れば己が足跡に

盲導犬が耳を立てる

花の散る観世音寺の月あかり

権五郎餅喰めば麗か

加藤 K

鈴木 千恵子

日高 英二

井上 蘭石

坂本孝子

K

恵

二

石

同

二

恵

K

恵

K

石

同

恵

切れ風を追ひ蒼穹を翔ける夢

癌病棟の奥の窓側

予備役でシャンソン好きでギタリスト

最後の曲は君と踊らう

仮面付け妻とは知らで触る唇

カント研究生涯の糧

行きつけの食堂の道ふと忘れ

ひたと動かぬ樟蚕の翅

水ラクダサイ七夕竹に鶴を折り

精霊舟を月光へ押す

秋場所の番付表を担ぎゆく

喧嘩で育つ兄と弟

深煎りの珈琲を挽く雪催ひ

ブロッケン山魔女の哄笑

ミステリー書きて昼夜の境なく

棕櫚の簞の先曲がるまで

梶棒を上げよ枝垂るる花の下

群れては散りし鳥の囀

平成十一年十二月五日 首尾

於 江東芭蕉記念館

二石恵 K 二石 K 同石恵 K 二恵孝恵

弁天橋

佐古 英子 捌

盆秋や弁天橋に波静か

下駄響かせる夕月の頃

鶏頭の燃えたつ赤をキャンバスに

バターたっぷり厚切りのパン

物売りに声をかけつつ小門開け

額の汗は皺に伝はる

袴着け竹刀かざせる端午の日

幼なじみがいまは我が妻

恋を捨て歌に生きんとイタリアへ

影はひとつにニ^{※1}ヶ神殿

新作の喜劇はきょうも大入りで

噂されたかくさめ連発

火の用心猫の後追ふ三日の月

妖怪図鑑古今東西

ボキヤ貧の総理しきりに電話して

蕎麦屋の出前もう出ましたと

花の山周りはみんな知らぬ人

干鰯を裂きてひとり酌むらん

佐古 英子
秋山 志世子
山本 要子
青木 秀樹
堀尾 春樹

世樹 世要 世要 樹英 要樹 海要 樹海

筆耕ナオの音かりかりと春時雨

司法試験にいまだ受からず

ハーヴァード寄贈名画の美術展

オーブンカフェで午後の語らひ

二人掛けひしと抱き合ふ観覧車

再婚すると墓に報告

老い母は根雪の里にひそと住み

秘湯めぐりのオヤジギャル達

ドラゴンを最終組に攫はれて

地酒入れたる瓢あめ色

望の月拌む姿の雄蟪蛄

Gパンのすそ牛膝つけ

優優ナウと名付けし保護鳥育てゐて

江藤淳書く看取りたる日々

西御門※2テニスコートに声弾み

さしみ定食蜆汁つき

忙中を何はともあれ花道遥

双蝶舞ふ野原ひろびろ

※1 ニーケ神殿＝勝利の女神ニケのギリシャ古代読み
※2 西御門（にしみかど）＝鎌倉の江頭淳宅界隈

平成十一年八月十三日 首尾

於 神奈川県立かながわ女性センター

要 英 樹 要 世 英 要 海 樹 世 樹 世 樹 世 要 海 樹 要

後の月

式田 和子 捌

さるほどにこぼす内証後の月

紫式部壺に一枝

秋茜群れていづれに行くならん

軽トラックのエンジンを切り

学食のメニューいろいろ和洋中

どてら被って試験追ひ込み

久々に貼り交ぜ屏風開かれて

昔のH顔をあからめ

先生が好きだ彼女になつてくれ

ローン残高それとなく聞く

広告のバリアフリーが気にかかる

蜈蚣うろつくお座敷の隅

夏の月膝がくがくの肝だめし

生命綱つけ下る岩山

ひっそりと社殿の脇の捨て神籤

デイバックの子の甲高き声

たどたどし異国語もよし花見酒

雛あられば猫に嫌はれ

中 林 あや

式 田 和子

中 森 美保子

山 口 美恵

吉 井 景子

橋 本 喬木

伴 野 末季

木 恵

石 川 貴美子

宮 崎 夫美子

や

景

保

季

景

木

季

木

ナホ

「春の海」晴着に袖を通しみる

のっぺらぼうの人力の客

底冷えの駅の放送電車事故

女礼者の甘い挨拶

砂時計長いキッスで舌からめ

髭こく情も深き閨技

天使魚下駄箱の上ひいやりと

ゼリーつるりと皿を逃げだし

行商と隣合はせの木賃宿

携帯電話指がはづれる

宗祇水月のかけらも飲みほして

野分の畑を守る父母

や^{ナウ}や疲れジムの帰りの赤い羽根

レム睡眠の定かなる夢

生ぐすりの粒を噛むほど饒舌に

鶯の声真似て呼びかけ

十一面観世音菩薩花の中

陽炎ゆるる東片町

松
本
順

貴 や 木 恵 同 季 夫 恵 や 和 保 恵 夫 貴 季 景 和 一

平成十一年十月十三日 首尾
於 仏似山 一音寺

風の滴り

杉山 壽子 捌

東郷神社風の滴る中にな

蟬穴ひとつ走り根の先

図工室三角定規取り出して

ガムにキャンディ探るポケット

中天の月を持ち揚ぐクレール車

稽古了らぬ舞台うそ寒

秋^{アキ}拾彩面白く端縫ひせる

デートスポット勘違ひして

カクテルはマダム特製「恋知らず」

人形の瞳に見つめられつつ

けん玉の県大会に勝ち残り

背山に遠く寒猿の声

着ぶくれの農夫合掌月まろし

マンション住ひ畳少なき

富本銭掘り出し変はる考古学

話の腰を折ってにっこり

げに永き刻の痛みよ花筵

かぎろひの野に犬と入りゆく

杉山 壽子
副島 久美子
下鉢 清子
小出 きよみ
梅田 利子
高橋 豊美

利美 豊美 清美 豊美 壽清 利美 清美 壽清 清美 美

春闘^{ナオ}は職をよこせとブラカード

長良川べり国盗りの城

酒蔵に白壁ずらり並び立ち

名医の技は運針の効

オルゴール鳴らせば過去の蘇り

煮ても焼いても食へぬ出目金

端居せる拗ねっぱなしのおば様

昔の男許してもよし

ボンドガールナイスバディに磨きかけ

魔法の髪を掛けるジプシー

高原の織月に雲うすく展ぶ

師弟打連れ虫を聞く会

早稲^{ナウ}みかん指の先より香らせて

引越し貧乏だけの人生

七カ国操るあいつ旅が趣味

松坂登板ドームどよめく

ベビーカー幌にいっぱい花吹雪

蛤寄せる遠浅の海

平成十一年六月十六日 首尾

於 東郷神社 和楽殿

豊 清 利 美 清 利 美 豊 清 豊 み 美 壽 清 豊 利 清 利

ふり上げし鎌

鈴木美奈子 捌

風の行きどころなし金曜日

枯蟪蛄のふり上げし鎌

棟梁の指図きびきび無駄なくて

サーブ決まればあがる歓声

草競馬双眼鏡に昼の月

母がつくりしままかりの鮭

秋簾^ウよぎれる影の誰ならむ

束ねし髪をばっさりと切り

恋に果つ少年の名はテロリスト

オシアンの古歌刻むレリーフ

海鳥は水平飛行冲めざし

帆船に夢のせる還暦

バナナ剥き頬ばれば月ゆうらりと

かはたれ時の涼み浄瑠璃

番頭が売掛台帳持つてくる

幸福なりし銀行ご破算

酒席ぬけ一服つける花朧

大念仏に蛙和したり

松本 碧
鈴木 美奈子
池田 やすこ

碧こ奈碧こ奈碧こ奈碧奈同こ碧こ

鬼^{ナオ}ごっこ鬼になる子の暮れかぬる

ジョーカー引いてとぼけたる顔

足まかせ杖にまかせて曲阜まで

湯吞茶碗に躍る魚偏

願事をかけたきときに神は留守

燃えさし同志足袋脱いで燃え

ユトリロは娼婦シュザンヌ母として

伝言板を読むが愉しみ

この電話傍受されては困るよね

夜逃げの相談つつぬけの壁

月の外捨つるものなし乞食僧

十八豆実る相模野

隠^{カウ}し湯は紅葉天愁羅にぐり酒

尿道結石いつか流るる

とび入りのOBグリーを盛りあげて

放送大学卒業の春

石舞台馬子現るるか花明り

天上地上囁りの満つ

平成十年十二月十三日 起首

平成十一年四月二十日 満尾

於 新宿 滝沢

奈 碧 こ 奈 こ 碧 奈 碧 こ 碧 こ 奈 碧 こ 奈 碧 こ 奈

月の座

染谷佳之子 捌

月の座の畳に置きし湯呑かな

香りすがしき投げ入れの菊

赤い羽根制服の子等一列に

手渡されたる猫探すビラ

パソコンのマニユアルやっどクリアして

いつしか遠くなりし雷

けもの径不意に途切れて滴れる

淡き想ひを託す絵手紙

年下の彼は巴里で修業中

ジャンヌ・モローの行きつけの店

三分はあつと言ふ間の砂時計

ぶっかけめしにこうこ二切れ

鯨見の船に乗りこむ昼の月

とつくりセーター父のおさがり

新しき職場白亜の焼却炉

ひっそりと立つ塞の神さま

花咲いて朱鷺を育くむ佐渡ヶ島

ぶらんこ漕げば雲のかたぶく

染谷佳之子

竹田登代子

登坂かりん

山本千代子

之

登

千

ん

登

千

同

之

千

ん

同

登

同

千

のどらかに婆たちのゆく無尽講ナオ

馬糞を踏んで丈の縮みし

球場へ街道沿ひに西武線

怪物ルーキー八重歯可愛ゆい

御器嚙のキーホルダーのプレゼント

祭ばやしが路地の奥より

酔はされてそれからあとの夢心地

両掌にあまる乳のまぶしさ

愛玩の虎に五匹の子が生まれ

宋家の姉妹共に傑物

吟詠の広き天地月渉る

旅行鞆を濡らす霧雨

取りに來ぬ松茸籠の忘れものナウ

アルツハイマーだけは堪忍

古本のブラックジャック読み返し

味噌のにぎりをこんがりと焼く

異人館海一望の花の庭

ばらもん風を飾る空港

平成十一年九月七日 首尾
於 大久保地域センター

ん 之 登 ん 之 登 之 同 ん 千 登 同 之 ん 登 ん 千 ん

野 仏 を

高橋 豊美 捌

野仏を抱かんばかりに女郎花

光たる河橋梁の月

相撲取結びあげるほど髪もなし

猫も早起きラジオ体操

カプチーノマフィンお替りカフェテリア

風薫る日の郊外の駅

青簾透けて海見ゆ島も見ゆ

応援をする子等の喚声

お兄ちゃん勇気を出して照れないで

新宿二丁目男になる時

あこがれのカリスマ美容師肩に触れ

ぐつぐつ煮える卵雑炊

辺境の月も凍るか幕舎の夜

リストラをする立場逆転

鮮やかに早変わりする猿之助

期間限定酒もさまざま

狂ひ咲き遅咲きもあり花の山

蝶を追ひたる道の暮れゆく

緒 方 健
高 橋 豊 美
小 池 啓 子
山 本 要 子
山 田 美 代 子
古 賀 一 郎

健 要 郎 同 要 同 健 郎 同 代 同 郎 啓

春日傘少し傾け遠会釈

其の名は知らずいつも心に

すり寄ればすぐ寄り返す君なりき

エステサロンでイメージチェンジ

寄せ鍋の中味ははてな何だろう

蒲団にもぐり聞く「深夜便」

朝刊のポストに落ちる音もして

陶器の市の幟はためく

手相見に生命線だけほめられる

偕老同穴亭主うんざり

ちんどん屋月に踊れる摩天楼

やや寒に聞くハーレムのジャズ

梅擬被告原告言ひ募る

資格試験に頭痛鉢巻

愛犬の散歩はいつも小走りで

帰り舟には白魚の魚籠

花守の三代愚痴もこぼさずに

うつらうつらとのどらかな午後

平成十一年九月二十五日 首尾
於 角筈地域センター

健 同 啓 代 健 同 健 郎 要 郎 代 要 郎 要 郎 健 代 啓 豊 代

復^オ活祭美髭蓄へ辻楽士

ひやかしの筈いつかぞっこん

セーラー服着せて脱がせる老いの趣味

壺よ皿よと探すデルフト

葡萄酒の銘ともなりて建つ館

国士無双を自^つ模り逆転

タブレット取り替へ作業梅雨しとど

雷鳴の裏山で鳴く

優勝と憧れの座に出島酔ひ

平氏の裔を誇る能登人

膝薄き女と逢ひたり蛾眉匂ふ

忘れ扇は又来るの謎

ぬ^ちり壁のスクリンセーバー^{※2}そぞろ寒

ペットロス症鬱^{※1}の始まり

ご注文・汁・昆布・鮫鱈のやうなもの

ちびりちびりと宵の小半

橋暮色花の奥よりひろがりぬ

こくと揺れて流れゆく雛

※1 身世打鈴||韓国的身上相談
※2 スクリンセーバー||パソコンの画面保護用の擬似画面

順 嬬 枝 枝 二 順 昌 二 枝 順 枝 順 昌 順 嬬 枝 文 二

平成十一年七月二十一日 首尾
於 江東芭蕉記念館

人を喰ふ

鬼子母神に遊ぶ

人を喰ふ句もひとぐさの師走かな

年越蕎麦の届く道場

ブティックのマヌカンみんな微笑みて

からくり時計電池取り替へ

三つ星の文庫の手ずれ昼の月

荻に隠れた猫が出てくる

ケータイの音に沈黙きりぎりす

穢れたくない穢れたい君

後ろ手の指の動きは何ならん

空のバックを提げる撫で肩

女形巴里の一座で大もてに

ごとりと廻る粉挽きの臼

月あびて老鶯の声消ゆる

種もとらずにかぶりつく瓜

十五里を走り切ったるクリシタン

ガラシャ様には昨夜ご自害

角櫓夢追ふごとに花霏々と

留学生の手作りの風

膝送り

丹下博之

島村曉巳

青木秀樹

太田けんのすけ

古賀一郎

佛洵健悟

近藤守男

峯田政志

今宮水壺

日高英二

巳

之

け

樹

悟

郎

志

男

毎朝の若布荒布飽くならん^{ナホ}

亀の歩みにそろそろと従き

まぐはひて川はしくしく神を産み

初騎りついでにめぐる妾宅

厄落し精進料理味気なく

座敷わらしのおなら可愛ゆし

雑居房お国自慢のたねも尽き

ロールス・ロイスで豚を運んだ

C Dで億余を稼ぐ十六歳

台湾万葉くちずさむ宵

天窓に月さしかかる庵住まひ

密造新酒さげて来る友

こだます^{ナホ}ほこらの声のやや寒く

破れ垣の下鴉啄む

山手線ぐるり一周ひと眠り

膝に置いたる「釣魚大全」

耳当つる花の若樹の中の詩

ブラハの春を今ぞ言祝ぐ

平成十一年十二月十四日 首尾
於 雑司ヶ谷 大倉

二 壺 之 巳 樹 け 郎 悟 男 志 壺 二 之 巳 樹 け 悟 郎

風の路

豊田 好敏 捌

麦秋や西から起る風の路

身じろぐそぶり見せて玉繭

折紙を習ひ初めたる子等群れて

ダンゴ一串スーパで買ふ

追伸に月美しと記しおき

明荷をかつぎ相撲巡行

菊人形^ウ衿より水を注がるる

酔いも甘いも嗅ぎ分くる肌

目覚むれば隣に眠るニンフェット

笑って別れ後の号泣

難癖の貿易摩擦承認し

インド大使も鼻風邪を引き

千年紀終り行くなり除夜の月

波打ち際に立ち上る魚

原発のおらが町にも来ると言ふ

すべて明瞭だった青春

咲きて花散りてこそ花浮世なる

あちらこちらに配る猫の仔

豊田 好敏
日下 悟 乃
太田 けんのすけ
井上 鶴 鳴
宮内 志 乃
原田 千 町

志 町 鳴 悟 町 鳴 け 鳴 同 悟 志 鳴 町 け

二疊敷き祖父の絵風の上げかねて

清盛燃えし王朝の夢

野晒しの嗽々と哭く背戸の藪

ストラデバリを狂ほしく弾く

天国は汝と協演よモルヒネよ

蟻が運んだ蝶の片翅

端的に誰が悪いか言ってみろ

外貨で払ふ麻雀の負け

仰向けで寝ぬが僧のたしなみと

しまなみ海道けふも往復

水軍は月傾むくを待ちきれず

忘憂物を交すうそ寒

稲積オウ円く屈みて里の豊かなる

カーチエイスする老のつつ張り

外国語鸚鵡返しでマスターし

浅蜷井少しから味

東山魁夷の花の永遠なりき

うららうららに洗ふ筆の穂

平成十一年五月十六日 首尾
於 緑華亭

志 敏 け 悟 町 悟 町 け 志 敏 同 鳴 町 志 同 町 け 悟

ナホ

島のバス乗り降り自在旅のどか

時刻迫りぬひらり船長

勘当の向疵もつ次男坊

暖簾名ゆかし古都の和菓子屋

学期末底冷のする自習室

約す逢引人目盗みて

失恋といふが男の甲斐性ぞ

シャルウィダンス踊り疲れし

若返る服飾界のデザイナー

どら猫の瞳の光るものかげ

出で入りて月のいざよふ流れ雲

日展の荷の準備完了

ナウ

そぞろ寒いつの間にやら喜寿を過ぎ

一徹通す棟梁の技

三年で痺れきったる石の上

ゆっくりと解くお祈りの指

花の村ボクサー志望会釈して

親鳥子鳥連れだちて翔ぶ

壺 り 嬬 壺 嬬 郁 嬬 同 壺 同 男 壺 郁 同 男 嬬 男 郁

平成十一年十一月七日 首尾
於 江東芭蕉記念館

義士祭主税の役は女性なり

テストコースにこぼす微笑

世襲制廃することを社是として

父祖の残せしまひまひず井戸

はたた神関東平野に住み馴れし

そつと手渡す絹のハンカチ

お宝ががっぱがっぱと不倫妻

いつの間にやら破る禁煙

引き潮の浜に流木焼け焦げて

かもめは低く一羽二羽舞ひ

野球部の自主トレきびし朝月夜

メキシコ料理秋渇く頃

渋柿のたわわに父の忌を修す

夢占ひに長き行列

本結び舳ひ結びにはた結び

カルチア帰り語るひととき

遠山を画くキャンバス飛花落花

風そよそよと揺らす鞆韃

平成十一年十月五日 首尾
於 新宿 大久保センター

達 代 之 路 ん 達 登 達 路 登 ん 登 達 之 登 ん 登 路

船首像

原田 千町 捌

船首像色なき風を受けにけり

入り江静める初月の光ヶ

新品種蘭を育てる人ありて

親子といへどよく似たる声

地下鉄の下に地下鉄掘り進む

額の汗に結ぶバンダナ

冷^ッや酒に氣負ひて向かふ大太鼓

お不動さんに掏摸も参詣

これこそが恋と信じたばかりに

オフィリヤ浮きし淵の清らか

英文科肩身の狭き男たち

瓦礫に憩ふ多国籍軍

月の出に兎は穴を出つ入りつ

垣内をあげて楮蒸す頃

山懐パノラマで撮る磨崖仏

理科室の窓笑顔はじける

鳶一羽浮かれ舞ふなり花盛り

会心の球飛ばす麗日

原田 千町
大窪 瑞
日下 悟
青木 秀
日高 鶴
井上

町 枝 乃 樹 玲 鳴 樹 玲 乃 枝 樹 鳴 樹 枝 樹 枝

既視感の都市と思へり蜃気楼

カンデンスキー逆さまに架け

会長も社長もいまは監獄に

鍊金術にのめり込む僧

その効きめいかにと飲みし惚れ薬

後の素足押し戴きぬ

上簇の蚕の体透きとほる

電子の音に開く五次元

サイコロを三つ投げ込む碗の中

ちよいと試しにつまむてつちり

背戸の丘半輪掛かり父祖の墓

盆果てて皆ぼやく渋滞

喝采を受けるジャグラー黄落に

インターネットで探すチケット

定年の文字に諦念充ててみる

おかずたっぷり春の食卓

花朶花は巴の恩賜苑

蝶のダンスを追うて行く吾子

平成十一年九月十九日 首尾
於 緑華亭

鳴 町 玲 同 乃 樹 乃 玲 同 乃 枝 玲 枝 乃 玲 樹 鳴 同

鎌倉開府

本田 弥生 捌

清和かな鎌倉開府八百年

銀杏青葉の影の濃き階

ふりたてるでで虫の角触れてみん

鞆投げだし探す餡パン

マンションの窓に供へし月見豆

波音まじる爽籟の中

ひやひやと表札を読む門の前

君の名を訊く珈琲の香に

真夜中に結婚式をあげようよ

親は敬して遠ざけておく

鬼の城こころあたりと村起し

議員集り喧々囂々

月代の熱爛腹にしみとほる

失業率の高き冬ざれ

下町に安い噂のなんでも屋

選ぶに迷ふダービーの馬

花万朵クイーンの帽子貴賓席

探偵は髭撫でてのどらか

橘 文子
本田 弥生
岩垂 景翠
高橋 豊美

同 文 翠 美 文 翠 生 美 翠 文 美 文 翠 文 美 文

ナオ
からくりの人形ぼんと紙風船

薄胎磁器に透かす憂愁

点心とお茶の接待湖心亭

呪文に似たるカナリアの声

明け易し夢きれぎれにまた眠り

無期の判決逃亡の果

老いてなほトライアスロン挑戦し

鉄のハートを溶かす純情

万華鏡めまひのなかに抱かれて

神様だけが御存知の筈

ゼロ問題コンピュータのそぞろ寒

一筆書きで丸い月の絵

オウ
借景の背山仰げば粧へる

藤沢周平街道を行く

お互の生涯語りくぐり橋

歌を楽しむ陽炎の土手

掌を受けて花びら吹き散らす

浅蜷のピザを至急配達

平成十一年六月二日 首尾
於 鎌倉おんめ様

美 同 生 文 美 翠 生 文 翠 美 文 生 文 翠 文 美 翠 生

受け継ぎしめ組の纏江戸の春

野次馬根性失はぬ爺

宇宙船ストーンサークル写し出し

火星の友に送るFAX

夜濯の手を止めて聴く闇の声

蛇の寝蓐座に何か蠢く

羽づくろひして雉鳩の輝やける

源氏の君にあやからんとて

小指たてニユースキャスター降番す

湯舟にひたりふつと居眠る

漠とした不安を抱く月の丘

右に左に揺るる穂芒

赤福に五十鈴の流れ秋深む

異国の人の抱くギタルラ

反戦を誓ひし館今は無く

塗り替へられた道路標識

走り去るかくれんばうに花吹雪

ひいふうみいよのどやかな昼

平成十一年四月二十三日 起首
平成十一年四月二十九日 満尾

昭 草 江 良 草 昭 良 江 昭 草 江 良 草 昭 良 江 昭 草

端居かな

この命幾度拾いし端居かな

じわりと沁みる梅酒一杯

夏を追うデュオの歌声かるやかに

山を崩して新しき街

ブティックのマヌカン照らす月青く

鰯の群の動く水槽

やや寒の時刻表繰る旅心

あとにはひけぬオフィスの恋

妊娠のしらせにあせる彼の顔

水平線に船が傾く

分校のマイク聞こえる石切場

兄弟で読む怖いお話

月天心こは狐の通る道

まだきしきしと揺れる吊橋

来し方を思えば遠く来たもんだ

署名運動検事動かす

花降れば一件落着江戸の昼

テレビと暮らす春の風邪引き

矢崎

藍 捌

後藤 東潮

柿本 ときよ

黒木 美代子

と

八木 聖子

矢崎 藍

由川 慶子

福井 直子

小野 芳梅

小園 好

谷本 守枝

美

守

藍

好

美

梅

繁原 敏女

鯀空息子の帰り待ちわびて

手堅い会社リストラもなく

気が付けば捨てられていた粗太ごみ

哲学してる梟の森

君の星吾が星燃ゆる冬銀河

からめた指のしんと冷たく

地下室に止まったままの古時計

先端医療技術疾走

何もかも許してしまう仏さま

きわどい台詞言ってみただけ

夕月の跳べば飛べそな水たまり

芸術祭のあとのポスター

ちっち蟬まちがいメール着信す

地球が自転してる足もと

難民のテント静かに濡らす雨

鉢にわずかなレタス栽培

母よりもすこし未来の花を見る

潮寄せくる東風のただなか

平成十一年七月二十七日 起首

平成十一年九月十五日 満尾

於 桜花学園大学

加藤 治子

間瀬 芙美

稲垣 渥子

稲田 千寿

後藤 志津枝

後藤 志津枝

慶 藍

聖 よ

同 藍

志 慶

藍 慶

みね子

原

藍 敏

聖

聖

聖

聖

月夜茸

山口 美恵 捌

月夜茸天よりひらと縄梯子

ささらえをとちよつと気紛れ

暮の秋縞の袴を畳むらん

楽譜の下に忘れたるキイ

撮影所小道具さんは三尺寝

雲母のごときなめくぢの跡

ぼんやりとスクランブルのど真ん中

都会暮しの疲れにじませ

焦らされてしどろ蕩ける閨のやみ

あぶない写真言ひ値にて買ふ

甲比丹の出島長崎備忘録

みやげの朱欒みんなし

かじかんだ玉兎が見える宿酔ひ

青の時代のピカソなつかし

あんよいや抱っこをせがむ帰り道

高校生の自転車列

花大樹曲り家奥のおくら神

丸テールに薫る山うど

山口 美恵
中 林 あや
伴 野 末 季

恵 季 や 恵 季 や 恵 季 や 恵 季 や 恵 季 や 恵 季

ギァアと鳴く亀ロボットを考案し

肩で風切る飛び級兄弟

患者減り待合室はがらんど

田圃の中のコンクリの城

団体が残らず買ひし竹婦人

湧水そつと口移しする

妖精か謎めく笑に惑はされ

お守り付けた犬もA型

髭もじゃのユダヤのレビは厳めしく

昔理想の政治家もゐて

電子辞書ぽつと出て来た恒娥の字

キャンパスの隅林檎ころがり

近づけば百舌鳥の早贄オブジェ風

交通整理の婦警ご機嫌

故郷より同窓会の案内状

客用座布団縁側に干し

贅沢は花びら浮ぶマグカップ

憂ひほのかに横顔の雛

平成十一年十月十五日 首尾
於 仏似山一音寺

や 恵 や 同 季 や 季 同 や 恵 季 や 季 や 季 や 恵 や

◇
源

心
◇

夏 初め

混み合ひて渋谷青山夏初め

野鷲^{のじど}さへづる小鳥屋の籠

文庫本窓の近くに開きゐて

ことわって吸ふ煙草一服

李白^ウならいかに詠むらんけふの月

もみぢの枝を壺に投げ入れ

暖簾に人の温みの秋の暮

わいわい言つて出来たカップル

幼な妻玉子でも生むつもりらし

徹夜続きの研究所なり

亡命をうながす指令虎落笛

瑞穂の国はスパイ天国

花びらを吸ひあげてゐる象の鼻

似顔絵描きの筆ものどらか

今宮 水壺 捌

今宮 水壺

梅田 利子

長崎 和代

桑原 美津

倉本 路子

伊勢本 如代

同

利

美

和

利

路

同

利

い^{ナオ}ま北洋蟹工船より便りあり

水天宮で受ける胎帯

触れ売りの声音高座に残る江戸

ブランドものを競ふ親と子

トルソーを抱いてるやうな味気なさ

こそこそ宿で寝酒三杯

寒菊のくくられてゐる庭の隅

きしる引出し琴爪の箱

蔵の月「呪詛重宝記」ひもといて

膝っ小僧の並ぶやや寒

松茸^{ナウ}の飯の松茸さぐり合ひ

テープで流す時告げる鐘

ひとしきり谷に乱るる流れ花

殿様蛙飼ひて嬰樂

平成十一年五月二十六日 首尾

於 東京ウィメンズプラザ

和 如 路 利 和 路 利 美 同 路 如 和 壺 美

カフェテリア

金久保淑子 捌

蔦若葉つつむ小粋なカフェテリア

さくらんぼ盛る玻璃の大皿

遠郭公聞きつつ素振り続けるて

郵便配達声を掛けゆく

留^ウ学生見上ぐる甕望の月

打てどうるさき衿の残り蚊

そぞろ寒盗聴の耳長くなり

隣の嫁御いつもにここにこ

猫どけて甘えてみたいごろにちゃんと

五円を投げる村の天神

お茶受けは蕎麦のかりんと味自慢

戯曲練りあぐ旅も終りに

ほうやれほう盲の母は花に座し

ふらここ揺らす人氣なき浜

金久保 淑子

上月 淳子

松本 碧

梅田 利子

島村 暁巳

利

碧

巳

碧

利

淳

利

碧

淳

吹^{オス}きまくるトランペッター春の闇

物干場には夢がいつぱい

のらくろの手柄つぎつぎ心地よく

はやされ一気呷るバーボン

初席の仕方話に湧きたちぬ

綺麗どころが飾る繭玉

帯解けば鏡に拗ねる彼のゐて

ビデオ再生早送りする

下弦月端山の尾根を渡りゆき

遠く近くに威銃鳴る

脳^{ナウ}死論物議沸騰芋煮会

朴鹵の下駄の鼻緒ゆるみし

花ふぶく湖北に美しき観世音

諸子鯉に鮓も帰り来

平成十一年六月三十日 首尾
於 東京ウィメンズプラザ

淳 淑 同 巳 碧 利 同 巳 碧 同 淳 巳 利 巳

新宿の空

篠原 達子 捌

初懷紙新宿の空晴れわたり

駅の広場に猿曳の芸

テレビジョンユーロの話題賑やかに

すこし煮すぎた番茶ごくごく

ほんのりと夕月かかる夏木立^ッ

井筒溢れて在五忌の庭

黒髪を腕にからめて御簾の奥

ぺちゃんこばいに悩むハイティーン

音作るシンセサイザー摩訶不思議

ぼろ市で売る鬼の禪

闇汁を箸でやたらに掻き回し

文句も言はず笑まふ長老

母国語でアリラン踊る花の下

訝返しの鶯のこゑ

篠原 達子

染谷 佳之子

倉本 路子

登坂 かりん

今宮 水壺

竹田 登代子

之

ん

路

登

壺

ん

之

登

ナオ
さんがめしほろほろ食ひて春惜しむ

白いポリシェで飛ばす湾岸

買ひまくりカード破産で雲がくれ

いつも不在の角の交番

蛸壺に鉄線かづら活けられて

みめうるはしき権妻の猫

やりなはれわては小春になりまっせ

チャンプになるでえわいはボクサー

酒断ちのお百度参り月照らし

いつしか減りし籠の鈴虫

ナウ
常の顔寄ってすずろの秋団扇

息子の電話果てるともない

園児乗せ花に触れゆくケーブルカー

代りばんこにしゃぼん玉吹く

※さんがめし魚介のおぼろをのせた丼。房総の漁師料理。

平成十一年一月五日 首尾

於 大久保地域センター

壺 達 ん 壺 之 ん 路 ん 登 路 壺 登 之 路

深秋の

副島久美子 捌

深秋の甲斐の旅路やいつも富士

月傾けて刈田ひろびろ

五線紙に虫の調べを写すらん

膝に上がって蹲る猫

夏^ウ兆すつば広帽子飛ばしたり

襟裳岬にたちこめる海霧

学校も親もうざいと気が合って

寝袋一つ駆落と決め

サラ金の取りたて電話鳴り通し

釜揚げうどん口焼きて食ふ

おやこれは泣きじゃくる児の迷子札

小石積まれて辻の野仏

しろじろと真昼静けき花大樹

流離の詩人夢もおぼろに

副島久美子

金久保淑子

百武冬乃

木村真呂

今宮水壺

久保光代

乃

代

淑

代

壺

淑

乃

呂

初^ナ虹のライン河畔に市が立ち

塔をかすめて取材小型機

刻々と環境時計歩を速む

ヘヤスプレーに孫は逃げ出し

ほろ酔ひの寒月描く筆の先

なぞれば溶ける雪女郎の肌

好者に誘ひ込まれて蔵の中

犬やらひ竹埃うっすら

汗拭ひついで詣りのお稲荷さん

ハローワークに職のなければ

淡^{ナウ}谷のり子拒み続けしもんぺ服

みんなの体操腰掛けたまま

花筵お国自慢に花咲かせ

百千鳥鳴く野辺の遠近

平成十一年十月十三日 首尾

於 池袋 滝沢

乃 淑 呂 代 壺 呂 淑 乃 壺 呂 乃 代 久 呂 乃 代 久 呂

七夕や

山崎 一恵 捌

七夕や帯にケイタイはさみをり

裏木戸あたり淡き月影

蜂の子煮甘み辛みのほどほどに

漢字書取り宿題を見せ

敦煌^ウの御仏の笑み何世紀

トラックを駆る汗と埃と

しどけなく寝莫産の脇にすべり込む

あやしい映画恥らったふり

皓々と夜のコンビニ混んでゐる

何故か空しい壺入りの水

特等地天皇のましまして

虎の模様の猫と目が合ふ

大鳥居京の色濃き花しだれ

風合戦の賑はへる丘

山崎 一恵

中村 あや

山口 美恵

篠原 達子

恵

達

や

恵

達

や

恵

や

達

や

オ
荒布刈る爺さまの背の遅しく

かみさん強きたのもしの講

「ボンジュール」「グーテンターク」暗記して

モップに乗った魔女が飛んでる

月渡る永久凍土音もなく

年賀状としてしゃれた絵手紙

もう一杯ワインをお飲みカワイコちゃん

何処つついてもキャアキャアと言ひ

巖に般若心経盗聴器

多喜二の話する人もなし

ナ
瘦っぱち又一キロも落つことす

ボクシングジム優勝にわき

やはらかく花で彩る山の峰

しいさあ濡らす雨の暖か

平成十一年八月十一日 首尾

於 池袋 滝沢

恵 達 恵 一 恵 や 達 や 恵 同 達 同 恵 一 同 達 同 恵

冬紅葉

東 郁子 捌

潮入の池滔々と冬紅葉

時雨の洗ふ青き庭石

ペンダントビーズ連ねてつくるらん

ブレンド珈琲話はづめる

月光の曲鍵盤を流れゆき

彼の許へと霧の終電

牧閉す小屋に身の上語る愛

鉦彫仏おほどかな笑

オークション名画名陶耀り落し

墨絵かと見る中国の山

道端の床屋に客の列なして

たこ焼売りのおらぶ呼声

オークスの向正面花の雲

風船の数ふゆる中空

東 郁子

原 田 千 町

松 本 碧

神 谷 安 子

金 久 保 淑 子

鈴 木 慎 二

同

町

淑

碧

淑

安

二

淑

三代の飾り納めん雛葛籠^{ナオ}

厨の隅に盗人^{ぬすど}が酔ひ

英語劇さらふ台詞の響き来て

待降節のイルミネーション

戦場の厳しさ告ぐるニュース塔

看護婦の胸癒す重傷

許されぬ恋の障壁つひに超え

ひらり引退舞の海関

きらめける黄金^{きん}の滴りまとふ月

うっそり下がる垣の空蟬

さまざま^{ナリ}の挫折も夢にわが一代

新世紀来る希望あらたに

誘ひ合ひ桂離宮の花賞でむ

子供ら遊ぶ柔東風の中

平成十一年十一月二十四日

於 源心庵

町同碧町安碧二碧町安淑安郁二

◇ 短歌行 ◇

討入の日

青木 秀樹 捌

討入の日過ぎて四日やたぬきそば

法螺吹き同土煤逃げの客

水平線異国の船の行くならん

メモが一通抽斗の中

は^ウったい粉むせれば月の顔しかめ

藍の浴衣につつむ裸身

こっそりと婚前旅行北の果

魚いらんか響く売り声

口当たり良きテキーラにだまさるる

ブロードウェイの初演幕開け

妖精の舞ひ狂ひたる花鳥

膝にじゃれつく仔猫三匹

青木 秀樹

東 明 雅

東 郁 子

松 本 碧

豊 田 好 敏

鈴 木 茂

佐 古 英 子

生田 目 常 義

雅

樹

碧

郁

春潮^{ナオ}の高まりわれに押し迫り

地雷除去する兵の集団

雑踏の市場居眠りする老爺

人智をしのぐ新種ウィルス

惚れ薬古今東西効きめあり

肌の恋しき夜寒朝寒

土器に託して運を願ふ月

にやりイチロー収穫の秋

全車^{ナウ}両同じ広告ぶら下る

夢のはとりにいつか佇み

花の山音も清らかに宮大工

屋根の彼方に消えし白蝶

平成十年十二月十七日
於 電通本社会議室 首尾

義 英 茂 敏 碧 郁 雅 樹 英 義 敏 茂

お降りや

浅香 宏子 捌

御降りや静かに街の灯が点り

となりの猫と交すお年始

三交替クロワッサンを焼きあげて

海辺のホテル流るるシャンソン

世^ウの鞭は受ける覚悟の月涼し

ごめんなさいと蠍座の女

文豪の時効となった恋の文

街の最中の大河きらきら

ミサイルがテレビ画面をとんでゆく

公的資金と化した血税

きりもなく同期の桜花筵

葉のむ事忘れうららか

谷本 守枝

八木 聖子

矢崎 藍

稲田 千寿

聖

藍

枝

聖

藍

浅香 宏子

寿

枝

遠近に声をこぼして揚雲雀^{ナオ}

自転車並ぶ夕暮れの塾

マフラーを襟巻と言ふ母ありて

木曾を過ぎれば飛驒の山嶺

彫像に我あくがれを秘めしまま

君がりんごをかじる喉もと

月皓とベイブリッジを離るる船

黒沢明この秋を逝く

屈託^{ナウ}を折り畳んでる箸袋

純米吟醸とつときが出て

花の雲宇宙への夢育ちゆく

園児が作る赤き紙雛

宏 寿 枝 聖 藍 枝 聖 藍 枝 寿 宏
執筆

平成十一年一月十九日 首尾
於 桜花学園大学

唐辛子

稲田 千寿 捌

唐辛子買うていきやと朝の市

野分も過ぎし島の残月

CDのフルートの音爽やかに

布を噛んでる背なのファスナー

し^ッつとりとふさいだ唇の過去未来

生き残りたる冬の雌蜂

雪しまく山の窯場へ続く道

しめきり迫るコラム抱えて

とっておきシャトー・ワインを空けちゃおう

造園主任二十七歳

花の昼母の小さな経机

大河ゆったり流る春陰

稲田 千寿

矢崎 藍

由川 慶子

八木 聖子

藍

寿

聖

藍

慶

同

聖

藍

石^ナ鹼玉ビルの窓より吹かれおり

老後とはさていつからのこと

紅型に帯はやっぱり黒い縞子

枕絵はらりめくる灯

あの世まで恋の鞘当て持ち込んで

大統領の首筋の汗

月暑しどこにも合わぬ鍵ひとつ

テトラポッドを舐める白波

名^{ナウ}を呼べど呼べど少年駆けてゆく

角を曲がれば猫の病院

しづこころなく降る花の日曜日

パン焼き上る夕べのどかに

慶 藍 寿 藍 同 聖 藍 慶 同 藍 聖 寿

平成十年九月二十九日 首尾
於 桜花学園大学

絲瓜垂る

木村 真呂 捌

恩寵の存在理由絲瓜垂る

目を閉ちて聞く邯鄲の声

お茶席に月見団子の供されて

G パンルックいつもお似合ひ

帆船^フの絵タイル踏んで港街

冬の董が風に揺れてる

留守電に逢ひたいと云ふ霜の夜

選りどりみどりお気に召すまま

てこずってスポツと抜けたワイン栓

君が代・日の丸法制化成る

花万朶二十歳の遺影笑みてをり

孫と並んでかぎろへる丘

木村 真呂

副 島 久美子

伊勢本 如代

久保 光代

有田 佳実

久

如

久

如

久

光

同

羊刈^{ナオ}る電気鋏のピカピカに

物語るごと馬頭琴の音

チーズ入りビスケットらし囁^{ソソ}んでみる

実行あるのみ好きになつたら

ふくよかな乳房の刺青色深^{シトウ}み

森の奥処に鶴の羽ばたき

月中天キャンプファイヤー果てし後

カーナビゲーション津軽弁なり

老医師^{ナウ}の往診鞆^{ナウ}くたびれて

だんだん増える晩酌の量

歓喜仏ひとと相抱く花の冷え

大地潤す春の湧水

平成十一年八月十一日 首尾

於 池袋 滝沢

佳 呂 久 同 如 同 佳 光 久 佳 久 佳

紅葉月

下鉢 清子 捌

中天に望む山城紅葉月

玉兔を追うてめぐる外濠

パッチワーク子に教へつつ夜なべして

銘菓の盆に渋茶添へられ

姦^サしい介護保険は誰のもの

洗ひ髪にてペタル踏む娘^{むすめ}

約束は白帷子の刀鍛冶

門前の市八の日に立つ

絵手紙の顔彩にじむ鳩の脚

縄電車ゆく童等の声

造幣局花のトンネルくぐりぬけ

つぶ餡入れて作る草餅

下鉢 清子

中田 風来

田中 安芸

井戸 可奈女

上杉 くみ

奈

芸

来

芸

奈

同

み

ナオ
春時雨遠峯の襷あはあはと

蛇行大きくふるさとの川

時差ボケも無くてハワイの旅を終え

ミュージシャンなの彼の仕事は

いつの間に愛の結晶出きちゃった

愚痴がいっぱい熱燗の酔

遠吠のときどき聞こえ冬の月

竹百幹に又三郎来る

ナウ
読み合はせ節も調べも母に似て

都電が過ぎるたびに家鳴り

妖精の羽音生まれ今日の花

十三詣大人びし顔

子 来 み 芸 奈 同 来 芸 子 奈

平成十一年十月二十五日 首尾
於 岐阜市文化会館

安房峠

須賀 敬子 捌

安房峠抜けて飛驒路の紅葉かな

冬支度なる村の家々

月に弓チェロのソナタのなめらかに

タイマーセットスイッチをオン

板前のおまかせ料理海老づくし

帰省の彼は髭を蓄へ

ハイレグの我がヴィーナスはジャンプ台

またたき初むる遠き漁火

流人等に読み上げられし赦免状

まはし飲みする密造の酒

花の宴貴賤を問はず招かるる

鶉となりし鼠ちよろちよろ

須賀 敬子

篠原 達子

大窪 瑞枝

倉本 路子

吉村 ゑみ子

竹田 登代子

染谷 佳子

長崎 和代

枝

代

登

枝

ナオ

ローカル線駅長さんのうららかに

無骨な指で伝票を繰り

売り切れの寂聴源氏物語

使ひ込まれし打菓子うちかしの型

スキートスキーテン十粒のダイヤ贈られて

絹のガウンで魔女となる夜

冬月の牡丹あえかにほぐれきて

鞍膏くらこうをつめる堂守

ナウ

ひとり子を過ぎし戦に失ひし

砂丘にふはりパラグライダー

大道のジャグラーに花降り止まず

春の帽にはそれぞれの夢

平成十年十月二十五日 起首

平成十年十月二十六日 満尾

於 大分県臼杵市 海の家

達 之 代 敬 達 登 路 之 路 枝

魚氷に上る

繁原 敏女 捌

瀬頭の光り魚氷に上るかな

ちらりほらりとほころびし梅

揺籠の嬰の熟睡ものどらかに

あとがきを読む贈呈の本

戸締りは他事として居待月

猿を相手に杣は猿酒

故郷の太鼓も古りぬ秋祭

シャイなあいつに心よろめく

愛の巣に姉弟と偽りて

病癒えても髭面のまま

二十世紀最後の花を見にゆかん

朝寝の夢を破る知事選

谷 本 守 枝

浅 香 宏 子

加 藤 治 子

繁 原 敏 女

宏 治

宏 治

宏 治

女 枝

枝 女

宏 治

治 宏

ナオ
囀りのなかに雀も混るらし

等間隔に並ぶ墓石

刈り取りしたちまち草を束ね終え

マウイの浜辺寄り添いしまま

宵の月朱欒のごとくぽっかりと

竹馬の友と別れ淋しく

ナウ
引越車さっと荷を積み走り去り

だんごの歌が街に流れる

風ゆらぎ楊貴妃桜花盛り

春を惜しみてたたむキャンパス

平成十一年二月十六日 首尾
於 桜花学園大学

女 同 枝 宏 枝 同 治 同 女 治

春の潮

生田日常義 捌

浜離宮廻るや春の潮満つる

揺れやはらかき岸の芽柳

白酒を玻璃のグラスに注ぎ分けて

姉妹たくみにピアノ連弾

夕月^{ツキ}にふりかへりゆく道おしへ

汗拭きくるる仕草やさしき

あしたには誰にささやくその言葉

五つにもなるゴミの分別

喫煙の次第に肩身狭くなり

おまはりさんはいつもご不在

返り花垣に黒猫通る穴

さかな湯豆腐かるくいっぱい

生田日常義

東郁子

山口美恵

松本碧

恵子

子

碧

恵子

子

碧

恵子

子

指^ナしゃぶる座敷童子も仲間入り

念仏僧の門に立ちゐて

新たなる宇宙飛行士夢多く

W ベッドにや狭いスペース

トリスタンイゾルデ交す熱きキス

鶴鴿の尾に似たる指揮棒

同窓会友と浅間^{あさま}山の月仰ぐ

虫歯かかへてリレー出場

産^ナ土に孫の安産祈りつつ

若鮎釣りの裾を濡らして

花明り拾の柄のあえかなる

白い大皿レタスオレンジ

平成十一年二月十八日 首尾
於 電通本社会議室

恵 義 同 子 碧 子 恵 碧 恵 子 碧 恵

尿する猫

登坂かりん
捌

沈丁や尿する猫の澄まし顔

垣の辺りに現るる初蝶

青年団絵風の仕上がりもなし

あのメロディーは誰のケータイ

バースデーケーキの甘く舌に溶け

好きと書く背短夜の月

色変はる男滝女滝のめくるめき

御師の案内で進む講中

文相は学級崩壊視察して

安定剤で狂ふ睡眠

餅花を飾りて披く蔵座敷

裸を脱ぎちよつと談合

登坂かりん

橘 文子

八代 嫺

大窪 瑞枝

文

同

嫺

枝

文

嫺

枝

同

敵寒^{ナオ}のシベリア鉄道ひた走り

ウォッカ呷りゆする揺り椅子

お婆様眼鏡ずらせて読む詩集

耳隠しした写真古びて

高慢な人になぜだか惚れちまふ

苔すさまじく募る劣情

月皓々衛兵守る城の門

大西風の吹き山の鎮もる

敗北^{ナウ}を出発と為す久野収

姿勢正して弓の練習

爛漫の花の奥より笛太鼓

新作展に春の友禅

文 嬬 枝 同 文 文 嬬 枝 文 嬬 文

平成十一年三月七日 首尾
於 江東芭蕉記念館

風見に鯨

八角 澄子 捌

梅咲くや風見に鯨かかく里

白き帆浮かべ海のうららか

釣釜の銘のいはれの語られて

電子辞書すぐ持ち出してくる

葡萄酒にハーブチーズを取り揃へ

瞑^{なみ}つてゐても見える梟

凍つる月揃つて豹の裘

きまりわるさを屠る定宿

次郎長の脇差なんぞ錆びてをり

ウルトラマンで遊ぶこども等

大花火屋からぞろぞろ人の波

見るだに痒し蚊柱の立つ

八角 澄子

高瀬 美保

山口 みづゑ

五味 蓉子

上月 淳子

岩田 玲子

内田 麻子

市野沢 弘子

松本 碧

弘 碧

淳 碧

碧

厄除^{ナオ}けの地藏尊堂丘の上

なんぢゃもんぢゃと名ある一本

あの野郎ポーカーフェイスでロンと言ひ

オペラ座怪人妖気吹きかく

つゝのる恋日も夜もあらず月も痩せ

脱げぬ案山子の緋あはれむ

今もなほ結を守りて稲刈す

美濃派伊勢派に遺る消息

座^{ナウ}の果てて鬼籍に入りし友と酌む

まづは占ふあすのお天気

満開の花に頷く新投手

張るは高音の谷の鶯

平成十一年二月二十五日 首尾

於 梶ヶ谷房連庵

蓉 保 澄 碧 弘 麻 淳 玲 忍 麻

天地凍つ

原
みね子
捌

清貧の悠々自適天地凍つ

ふくら雀の群れる庭石

公民館ママさんコーラス響きいて

忘れた時計出たと留守電

梯^ウ梧咲く海岸通り月昇る

切子グラスにワインなみなみ

嬰誕生キャンパス長き恋実り

気は弱いけど優しいの彼

肥満猫呼べば尻尾で返事する

押しつけ合いのゴミの処理場

縦横に高速道路花吹雪

サビエル像に満ちる春光

後藤 東潮

山田 たみ子

稲垣 渥子

矢崎 藍

渥

同

潮

藍

原
みね子

渥

た

渥

鳥交る人は大河に生計得て

そろりと外す舟のともずな

山際に一番星を見つけたり

戦火の町に忍び逢う女

少年を伝令にして「好きです」と

ブーケ・ド・アムール老いて明るく

熱帯のかそけき秋の果物市

今宵の月は青い宝石

新米をほっこり炊いておむすびに

磨き上げてる古いハーレー

花の旅漢ひとり泊めぬ宿

暮れかねている北国の空

潮

八木 聖子

小野 芳梅

聖

柿本 時代

潮

同

藍

代

聖

潮

み

平成十一年二月十六日 首尾
於 桜花学園大学

麦 嵐

膝送り

マ—ラーのうねり豊かに麦嵐

夏を届ける郵便配達

船着場一村の人かたまりて

力石など交々に持つ

松崎^ウのなまこの壁に月四角

金木犀の匂ひ袋よ

ふらふらと蹤いていったわ霧の森

そぞろに戯歎の込み上げてくる

手かざしはたしかな技に支へられ

神や佛はいつも留守がち

花を訪ふ旅の鞆を新調す

詩人の帽にいこふ粉蝶

水 沢 魚 乙

浅 賀 淑 代

日 高 英 二

佛 淵 健 悟

松 本 碧

乙 代

二 代

悟 二

碧 乙

乙 代

代 乙

代 乙

敗れたる祖国の空のおお雲雀^{ナオ}

真空管の青白き炎に

高枕炊事洗濯ロボットが

ノストラダムスあなた信じる？

一見の客は断るならひにて

横着そうに肥えた黒猫

寒月にプリマドンナの声細り

血を吐くほどの恋にあこがる

この流れ回春川と呼ばれたり^{ナウ}

姥捨山はうす雲を引き

花びらも日記に挟みぬ二三片

夜光杯置くよるの朧に

平成十一年七月十五日 起首

平成十一年八月十一日 満尾

於 西伊豆 サンセット松崎

二 悟 乙 代 二 悟 乙 碧 乙 代 二 悟

夏 薊

福井 直子 捌

夏薊人なき野辺の昼下がり

今年はことに蝉のよく鳴き

不器用な針の運びは母に似て

私をにらむスケジュール表

ロングヘア―ハーレーに乗り月の道

踊りの輪より君に投げキス

新妻のやさしき笑みと新豆腐

白いカーテン木漏れ陽に揺れ

ドイツより古城巡りの招待状

三大美声の響き朗々

花の雨降りてはやみてまた降りて

逝く人多し暮れてゆく春

福井 直子

由川 慶子

原 みね子

小野 芳梅

黒木 美代子

み

美

梅

慶

み

直

慶

忘れ潮磯巾着を見つけた^ナり

加藤 治子

ジャンケンポンで負けてばっかり

直

パソコンのメール仲間に謎多く

矢崎 藍

しじまを破る梟の声

み

花魁を待ちくたびれし掘ごたつ

藍

恋のかけひき絡みもつれて

直

昼の月ばかりと嵐過ぎさりし

み

新酒携え急ぐ師のもと

治

蚯蚓鳴く^{ナウ}なんぞと蘊蓄傾けて

藍

肥満猫めが大欠伸する

同

子守歌聞かせ育む花の下

治

田を返す手に力漲る

執筆

平成十年九月二十九日 起首

平成十年十月二十日 満尾

於 桜花学園大学

春潮や

谷本 守枝 捌

春潮や山を集めて屋久の島

漁れたて魚に胡葱の汁

紙風船ひいふうみいと上ぐるらん

つぶやくやうに童唄など

出^ッ発の空港デッキ望の月

あなたと二人秋の巴里へ

温め酒悪態つくも恋のうち

テレビ料理もちよっと取り入れ

神主の後継者なき大鳥居

蹴とばされてもまとひつく猫

花の湯と書いて木札を吊し置く

炉の名残とて友と茶を点て

加藤 治子	稲垣 渥子	谷本 守枝	長坂 節子	渥 節子	枝 治	渥 節子	同 治	治
-------	-------	-------	-------	------	-----	------	-----	---

ほた^{ナオ}たと落ちる淡雪磴半ば

路線バスゆく九十九折る道

藍浴衣抜衿にした留学生

すこしわけある夏痩せをして

何もかも振り捨て君を抱き締める

行商人の泊まる民宿

月皓々凍鶴の影動かざり

炬燵の中で采配をふる

肝^{ナウ}移植成功祈る老いの日々

だんご兄弟売れに売れゐて

ほぐれてはまた寄せてくる花筏

重ね合せる土雛の袖

平成十一年三月十六日 首尾
於 桜花学園大学

節 枝 渥 節 枝 渥 枝 節 渥 節 渥 節

◇二十韻◇

藤かをる

秋山志世子 捌

しつとりと雨後のみ社藤かをる

亀鳴くを待つ池の朱橋

春スキーパンフレットを展げゐて

タバコの缶は兄のリュックに

九十九折右に左に月めぐり^ウ

湯女が顔出すやや寒の垣

外国の夫に仕送る小重陽

ダム放流に岸の溢るる

学会に鮎の博士と名の売れて

じんべすててこ僕の普段着

秋山志世子

椿紀子

八代 嬬

日高英二

梅田利子

嬬

利

英

同

紀

ナ
ナ
浅草のからくり時計人集め

金釘流の写経千巻

ラブラブの彼によく似た狸です

官職捨てし恋の凍月

井戸掘を砂漠にするも苦にならず

馬頭琴鳴る悠久の時

ナ
詩を愛し酒を愛して五十年

仮寝の夢に故里の山

S Lの轟々とゆく花明り

世紀を映し蜃気楼立つ

平成十一年四月二十五日 首尾
於 亀戸天神社

利 紀 世 利 紀 英 嫻 紀 嫻 利

遠 干 潟

水鳥の笛の鋭し遠干潟

枯蠅の揺るる軒先

紅茶飲むうたたねの後電話来て

曆に印また一つ増え

昼^ウの月籤買ふ列の長々と

胸ときめかす踊り子の指

温め酒いかたと声のひそやかに

賄賂のきかぬ表玄関

取締るあちらとこちら入替り

白夜訪ねる北極の街

小 池 啓 子 捌

小 池 啓 子

豊 田 好 敏

横 橋 利 夫

青 木 泉 子

山 田 美 代 子

同

泉

同

利

好

雷神ナオの怒れる獅子の大顎あぎと

重ねて塗って壁画完成

絶体に嫁には負けじ姑歌ふ

夫と長男違ふ病室

寒稽古月にはっしと面を打つ

少年の夢ネット・ビジネス

結願ナウの札所に納む朱印帳

おちよぼ口にてすする生海胆

肌の色言葉それぞれ花の宴

山裾に風光る自転車

平成十一年十一月二十七日 首尾
於 角筈地域センター

美 利 好 啓

美 泉 利 同 好 泉

江戸村の

近藤 守男 捌

江戸村の冬日大黒柱にも

近藤 守男

紫甘藍床に飾られ

松本 碧

待ちかねし新四駆車の届くらん

池田 やすこ

子供の声の弾むただいま

永島 靖子

潮溜り月の光を泛べつ^ッ

や

誘はれて行く盆の狂言

碧

畔道に抱擁解けば曼珠沙華

靖

キャンバスはまだ白きままなる

同

信貴山の縁起絵巻に鉢の飛び

碧

入場無料在位拾年

同

ナオ
二度三度地震のニュースに驚きて

任地へ送る地酒地麦酒

月を射る水鉄砲のまっしぐら

ロッセリーニへと走るバーグマン

生きかはり死にかはりして妻と僕

玻璃窓覆ふ大木の影

ナウ
ラジコンの模型飛行機操りて

アスレチックス春の風邪引く

花冷えに親猫仔猫かたまれる

酢苺売りゆくなだらかな坂

執筆

や

碧

男

同

靖

碧

靖

や

靖

平成十一年十一月二十二日 首尾
於 桃径庵

町割絵図

佐々木有子 捌

城のある町割絵図や菊繪

名残の月に独り酌む酒

運動会ビデオカメラで追ひかけて

プラスバンドの指揮をする友

忘れ物届けしことがきっかけに

どこでつけたのこの香水は

花うつぎ人に知られぬ屋あそび

神楽坂には多き料亭

二〇〇〇年二千円札出るとやら

真空掃除機吸ひ込まれさう

登坂 かりん

篠原 達子

須賀 敬子

佐々木 有子

橋本 妙

達

ん

達

敬

ナオ
ニューヨーク自己実現の若者等

減量失敗主役おろされ

あのねえとまた呼びとめる別れぎは

さらに燃えくるダッチマフラー

鰯船を送る漁村に月渡る

六十過ぎても夢は捨てない

ナウ
赤瀬川原平路上探険隊

卒業生の袴むらさき

窓開けて花びらいっぱい入れました

笑ひ仏に笑ふ山々

平成十一年十月十六日 首尾
於 赤城社会教育会館

敬 有 達 ん 達 ん 同 妙 達 ん

立冬や

式田 恭子 捌

立冬や樟脳の香のそこはかと

式田 和子

座席をゆづる着ぶくれの人

松本 碧

前置きの長き料理を前にして

紺野 千寿子

心ばかりのあかりとる窓

式田 恭子

訳^ウありの柱の陰の月の客

川名 将義

墓参りにもついてくる奴

寿

モンゴルの相撲の様にぐいと抱き

和

何やら転ぶ長い坂道

義

みまかりし「やってみなはれ」佐治社長

碧

音量高いテレビCM

義

ナホ
竹べらで始祖鳥の羽掘り当てる

蛇喰ふ村や鰐喰ふ村や

月涼し大仏の眼を描きし筆

尼になりたるときの黒髪

王位捨て世紀の恋を成就させ

パパラッチ達撮れぬスクープ

ナウ
来し方の夢おしなべて憂かりける

春の埃を払ふ鏡台

降りそそぐ花を受けたる舞扇

白酒ほして吾子の旅立ち

松原弘子

寿

碧

和

義

弘

和

寿

恭

弘

平成十一年十一月八日 首尾
於 神田分教場連句会

ハロイーン

島村 暁巳 捌

ハロイーンケルト訛の漁夫と酌む

島村 暁巳

霧立ち初むる海峡の駅

鈴木 慎二

月の宴胡桃銀杏前菜に

佐古 英子

子の宿題にちよつと付合ひ

秋山 志世子

わ^ッざをぎの白塗り終へて切火打ち

八代 嬬

乱れ籠にはれこのお守

同

おめざよと熱きカフェオレ口移し

世

豚の瀬戸物つもり貯金を

巳

鰯起し一艘分を投機買ひ

英

越前岬たば風の報

嬬

折紙で森羅万象紡ぎ出し

青龍刀を呑んだ陳さん

ソバージュの五尺の髪を梳る

氷菓のごとく女くづはれ

君送る蚊帳吊草の月の道

灯消える隔離病棟

ハーモニカ少年の夢頂に

賢治の国に春の土踏む

名刹の大庇にも飛花落花

空を遥に熊ん蜂翔ぶ

平成十一年十月二十七日 首尾
於 東京ウィメンズプラザ

英 巳 同 嬬 英 同 世 嬬 巳 英

藤浪に

鈴木千恵子 捌

藤浪に映ゆるや浅葱襦袢袴

鈴木千恵子

のどかに眠つむるなで牛

豊田好敏

弥生尽特急バスは満席に

坂本孝子

うたふカラオケすすむ酒盛り

山本要子

た^ッご蛙低音がよし雪に月

八角澄子

雑魚寝のすきにそつと抜け出す

敏

ひと筋の髪を証拠に詮議立て

孝

泰西名画嘘も交れり

澄

フィレンツェの丘軽やかに鐘響き

孝

大道芸に弟子入りをする

敏

運ナわるく鬼の霍乱町医待つ

脱ぎし下着よ蟬の殻どち

少年A心のうちをあかしかね

愛のむなしく色ながら散る

月光は平氏の夢か敵島

秋時雨して雨宿る鳩

まづナウいてふ青汁呷る悪役は

バンドエイドで伸ばす目の皺

花浴びて街中を練る親子獅子

故郷の川は鮎の放流

平成十一年四月二十五日 首尾

於 亀戸天神社

澄 要 孝 敏 要 孝 澄 要 敏 澄

鈴虫の

武井 雅子 捌

鈴虫のほしいまなり山の家

いま稜線を離れたる月

夜学子のいまだ幼き横顔に

ハンバーガーを口に詰めこみ

大通り祭囃に誘はれて

買って貰ひし夏帯の色

つぎつぎとできちゃった婚同窓会

河を挟んでボストンの街

雪舟も歌麿も居る美術館

馴染の店で鱈酒に酔ひ

武井 雅子
東 郁子
東 郁子
明 雅

郁 明 雅 郁 明 雅 郁 明 雅

五月の不景氣の世を生き抜かん

百済観音ほのかなる笑

髪染めて五十女がナンパされ

よくよく見れば齒黒べったり

流れ来る幽かな曲は小夜曲

犬と静かに暮す晩年

ホスピスのお世話にならず死ぬが夢

コンビニ弁当浅蜷佃煮

花の旅孫も曾孫も引きつれて

天まで高く揺らすぶらんこ

平成十一年八月二十三日 首尾
於 軽井沢 猿来荘

明 郁 明 雅 明 郁 明 雅 郁 明

熊手市

埼玉の訛でしめる熊手市

声をからして寒風の杜

買ひ物は電子モ^{※1}ールできりもなし

クレーム処理で潰す一日

汐^ウ早き回廊に月青白く

美男蔓の下で撮影

ダフネスとクロエのやうな秋の恋^{※2}

九官鳥呼ぶ名前ばかりを

選挙戦なぜかおびえる永田町

腹の贅肉なんでとらうか

中野 昌子 捌

式田和子

松本 碧

中野 昌子

豊田好敏

池田やすこ

和

碧

こ

碧

こ

文学部無くせと迫る非常識^{ナオ}

源平堂時間差で飛び

月涼し縄文後期紅の櫛

かいやりくれし人ぞ恋しき

ウオッカの炎の酒を口移し

婆さま民話の夢の語り部

故郷の太鼓を積んで西東^{ナウ}

駅伝襷かげろひの中

再出発夫婦の畑に花繽紛

身欠鯨の味のほっこり

※1 電子モール↓インターネット上に出てくる商店街

※2 タフネスとクロエ↓ギリシャ神話にある少年と少女・「潮騒」の下敷き

平成十一年十一月九日 首尾

於 渋谷連句会

敏 昌 碧 和 こ 敏 和 碧 和 敏

若き面輪

松本 碧 捌

自画像の若き面輪や思ひ草

今宮 水 壺

忘れし頃につと昇る月

山口 美 恵

覗き込む郵便受にちちろゐて

松本 碧 恵

犬用クツション通販で売る

恵

ミステリー作家の集ふ路地の奥

中川 凡

時間守らぬ女に寛容

恵

終電の出づるをしほに抱き合ひ

凡

きれぎれきこゆ鈴に御詠歌

碧

初氷ひとかけ割って子の口に

恵

棚のコニヤック寢酒朝酒

壺

島^{ナオ}抜けのナポレオンです帽もなく

鼠穴には鳥糞の罌

目には目を唇には唇を押し当てる

男妾はびいどろを吹き

長崎の沖の片帆に夏の月

ひそと静まる吉利支丹村

骰^{ナウ}子^{さいご}にまかせて生きて要介護

蛙の顔は見分けつかない

よく晴れて何はさておき花見せん

扇風売りへうきんな声

平成十一年九月二十七日 首尾
於 四宮連句会

凡 碧 壺 凡 惠 壺 碧 惠 壺 碧

鶴来る頃

峯田 政志 捌

冬晴れや払ひてみたき隅の雲

峯田 政志

あの山を越え鶴来る頃

篠原 達子

同人誌ゲラ刷りやっとあがるらん

中林 あや

こくりこくりと椅子で居眠り

山口 美恵

月^ッ明り自転車も乗せ渡し船

梶井 時子

送り火を焚く指のやさしさ

恵

アップルパイ二人の黙はつづきをり

達

ニューヨークまでポケモンが来て

時

親分も子分も同じ大学出

や

名刺肩書選びかねてる

恵

ナオ
方違へ喪服のままでビヤホール

なめくぢの這ふ窓に織月

靴跡で推定できる待時間

やつれぼくろの浮きし首筋

ひと妻と知りし時よりいよよ燃え

跳ねつ躍りつ俎の鯉

ナウ
うろ覚え戦前の地図復元し

公団広場ぶらんこの児等

猫抱き花に埋もれるホームレス

ぽつぽつと出る春の椎茸

平成十一年十一月十日 首尾
於 池袋 滝沢

や 達 志 時

達 や 恵 や 恵 時

春嶺

春嶺のその名したしき立机かな

めでたさに咲く梅のうす紅

高速路雉親子の横切りて

髪の毛のりぼんのゆれゆれてゐる

大鍋^ウに自慢のカレー夏の月

あばずれっぽく誘ふ香水

捨てないでおひやくど参りしたるゆゑ

同床異夢の派閥連合

昼^{ひる}九夜^{くよ}八船^{はちせん}七馬^{しちば}六酒^{ろくしゅ}はよき

砂漠の民のゆったりと胡坐

八代

嫋捌

八代 嫋

染谷 佳之子

臥猫庵 千町

内田 公子

和田 順子

中野 昌子

公

之

町

同

ナオ
かけひきが下手で絨毯買はさるる

鎌鼬めくネット犯罪

念願の窯場訪ぬるひとり旅

秋の芝居の仁左衛門好き

月光を浴びて狂女の蒼く舞ひ

怨念抱きて蛇穴に入る

ナウ
土笛の風に乗り来るトスカーナ

コーヒー豆を店先で挽き

思はざる花の盛りに会ふことよ

笹の葉敷きて栄螺常節

平成十一年二月十七日 首尾
於 KDDホテルストラダ

之 昌 順 公 順 昌 順 町 之 公

洗ひ髪

吉村 ゑみこ 捌

洗ひ髪忘れ度きこと二つ三つ

月下美人とはやされし頃

フルートの何処方より響き来て

レーズンケーキクリームたっぷり

玉兎^ウ宇宙飛行士宙返る

宗旦木槿掃き寄せる母

チロリアンハットに飾る赤い羽根

名門校の制服が嫌

後から魔王がそっと囁きて

鳥刺し夫婦子供ぞろぞろ

秋山 志世子

同

豊

巳

代

豊

吉村 ゑみこ

島村 暁巳

長崎 和代

高橋 豊美

古漬で^ナオ^オ pasta料理の新機軸

霰酒酌む信楽の杯

消防車月夜の街を走り抜け

若き司祭と只ならぬ仲

色も香もジゴロ好みの五十代

歩き疲れて熱き茶を淹れ

潮騒^ナの無人の駅に句を案ず

エープリルフルケータイが鳴る

暮るる中ゆるやかに行く花の雲

仔猫と遊ぶ広い縁側

平成十一年七月十七日 首尾
於 新宿赤城社会教育会館

世 同 代 同 豊 已
世 同 代 已
世 同 代 已

◇ 半歌仙 ◇

夏 燕

池田やすこ 捌

夏燕石の寝釈迦をはすかひに

文字摺草の揺るる細道

蹴轆轤を自在に蹴れば壺現れて

つなぎジーンズ裾まくり上げ

月に向け打ちし特大ホームラン

わりごの中はむかご飯なり

単線^ウを乗り継ぎ陸奥の初紅葉

子宝授かる秘湯あるとか

姫君にあぶな絵見する老乳母

嘘も好きならお茶漬けも好き

池田やすこ

豊田好敏

鈴木美奈子

や

中川凡

松本碧

美

凡

美

碧

告解に司祭は眼鏡ずり落し

朽野照らす月のしろじろ

与太郎が王子狐に化かされて

ロマネコンティ夢の乾杯

クルーザー絃のひびきを波にのせ

橋で結ばる春の島々

千年紀未来永劫花浴びむ

鮎放たれて八方に散る

平成十一年五月十八日 首尾
於 渋谷連句会

美 敏 凡 美 碧 敏 や 凡

鵠に

川名 将義 捌

ク、ヨミ、
ハク、ケ、ヨ、ウ

鵠にきかばやおろしや島咄

北風吹く磯に古代文字読む

いづくぞと額の眼鏡探しゐて

拾得物の時効近づく

自主トレに励む窓へと月の笑み

やがて蘭など贈られる人

酒^ウびたり秋の遍路をすすめられ

ウォークマンは笠の内なる

五十人独身男のゐる会社

やっと掴んだ年下なのだ

式田 和子

川名 将義

式田 恭子

紺野 千寿子

松原 弘子

和

恭

義

寿

同

ブライダル写真だけ撮り入籍し

鵜匠の綱を照らす松明

月揺らし一葉露を一しづく

イスタンブールにクリステイ消ゆ

先生をしえんしえいと呼ぶ入歯群

枕並べて春の風邪ひく

佐保姫がそつと花びら吹きこぼし

雛遊びの夢ではほろむ

平成十一年一月一日 首尾
於 はみんぐ倶楽部事務局

弘 恭 同 弘 和 寿 義 恭

野 焼 き

く の あ や 捌

はつはつと野焼きのあとに土筆かな

雲雀の声も聞ける此の頃

卒業の祝ご膳はあたたかに

部屋の掃除を念入りにして

月まどか敬語上手な外国人

パソコンに読む早稲の情報

クラス会高きに登り厄払ひ

信濃路の旅組んずほぐれつ

耳たぶに昨日のはてりまだ残り

バーチャルキッス彼のグラスに

中 森 美保子

く の あ や

杉 山 壽 子

森 岡 しげる

武 村 利 子

壽

や

美

壽

利

歳晩の風荒びるる広告塔

馬が主役の英傑行列

汗飛んでスポーツ選手馳ける月

濃きコーヒーを目覚ましにして

忙しくてぢぢになつてゐる暇はなし

懸賞応募葉書山積み

日の本も津々浦々の花万朶

屋台ひやかし気分のどろか

平成十一年三月二十四日 首尾
於 杉山壽子宅

る や 壽 美 る 同 や 利

桜かな

小園 好 捌

さまざまの事おもひ出す桜かな

翁

親に寄り添ふ仔馬濡れ色

繁原敏女

目刺し焼く隣家の煙流れきて

谷本守枝

財布の中味そつと数へる

小野芳梅

夜学生口笛吹いて月の径

女

茸は森のコーディネーター

同

芋煮会幼馴染とひさしぶり

梅

今をときめく人気俳優

小園

好

とっておきの話もちだす耳年増

枝

恋の傷あと包む羅

女

S Lの戦前戦後走るらん

いづこも同じ世代交替

弓張に屋台の熱燭ぐいと吞む

我慢できずに吠える獺犬

タレントが作家に譲る新都知事

ビル街行けば春の虹立つ

雛祭雪月花なる菓子を買ふ

浅蜷潮ふく調理場の隅

梅 枝 同 女 同 枝 女 好

平成十一年四月二十日 首尾
於 桜花学園大学

貨車通る

文 音

かげろふや歪むレールを貨車通る

李 應 洛

彩り加ふ丘の若草

権 頭 和 弥

蝌蚪のわれ人口過密の地に棲みて

素ぶり少々読書時々

洛 弥 洛

川照れば川くろぐろと月天心

野面いっぱい滾る芋粥

弥 洛 弥

つくつくし放牧山羊を山に追ひ

オカリナ好きな村の長老

洛 弥 洛

安居堂解脱に遠き顔並ぶ

洛 弥

人はそれぞれ恋もそれぞれ

弥 洛

相性も齡の違ひも一目惚れ

酒酌み交し白む稜線

オンドルのほどよき温み残り月

峠の昔みんな藁沓

中性子飛びかふ街を横つ飛び

アインシュタインの寝言恐ろし

手踊りの振りもまちまち花の真蔭

百済土城もの皆おぼろ

同 洛 弥 洛 弥 洛 弥 洛 弥 洛

平成十一年七月三日 起首
平成十一年十月二十日 満尾

零余子飯

紺野千寿子 捌

山昏れて風音ばかり零余子飯

川 名 将 義

かまつか指に蒼くつく月

紺 野 千 寿 子

秋拾下絵職人めざすらん

式 田 和 子

丸形ポスト残る下町

松 本 碧

銭湯に馴染みのおやぢそろひたる

義

吹雪溜りに置いてきた犬

和

初^ハ彌撒にほんの少うし懺悔して

式 田 恭 子

多額の保険夫に内緒で

義

伏し目がちのらりくらりにまた惚れて

恭

隠しカメラに逢引きの影

義

部屋大事親方大事揃ひ踏み

鼯鼠旦那に冷酒たっぷり

モンゴルのゲルでひいやり夏の霜

香草はみしマトンやはらか

大笑ひ齒の無い口の物語

お玉杓子の並ぶ五線譜

水灌頂杭くひせに花の散り込みて

朝寝の夢でにつこりと嬰

平成十一年九月六日 首尾
於 神田分教場連句会

和 恭 碧 同 恭 和 寿 碧

天の川

天の川佐渡には古き能舞台

笛の音澄みて渡る月影

子供等は枝豆飛ばし遊ぶらん

犬の訓練なぜか英語で

百円の安売ショップうけにうけ

氷の旗を部屋の飾りに

無沙汰詫び暑中見舞をやつと書き

借りた真珠の行方わからず

次男坊料理の腕で入婿に

彼女は恋の鉄人となる

須田 智恵 捌

須田 智恵

松本 碧

恵

碧

恵

碧

池田 やすこ

恵

こ

碧

銀行の合併劇に呆然と

つぶしきかないホワイトカラー

漣の淡海を照らす寒の月

氷魚の漁の賑はへる村

ままごとに座敷わらしもとび出して

おいでやすとて交はす挨拶

スニーカー草履ぽっくり花の坂

七宝焼は蝶の形に

平成十一年八月十七日 首尾
於 須田智恵宅

恵 こ 碧 恵 碧 恵 こ 恵

熱田の杜

武村 利子 捌

待宵や熱田の杜はこんもりと

秋風伝ふ玉砂利の音

あらあらと新そばを打つをとこみて

ハムスターまでじつと注目

リサイタル楽屋に入る夏帽子

噴水に透く踊る若者

地球には囚はれ人も飢ゑもあり

回転寿司はけふも賑はふ

鉢巻の奴は生です深夜便

抜き足さし足夜這ひ鞘当て

武村 利子

中 森 美保子

青 島 ゆみを

く の あ や

山 田 歌 子

保

を

や

歌

を

心中立て紅のしごきに月凍る

※
「おおたか」ゆゑに工事中断

辛口の酒を鞆に旅にたち

須弥山上に羅漢黙想

バス停に忘れられたる杖一本

ベストセラーを借りてうららか

幸せも盛りも追へり花吹雪

渡しの水尾のひかる春潮

※愛知万博予定地海上の森で

平成十一年九月二十二日 首尾
於 熱田 山田歌子邸

歌　を　や　保　を　や　保　歌

桜桃忌

松原 弘子 捌

この人生は男と女桜桃忌

清水 掬 甫

翡翠ついとよぎる小流

松本 碧

かやく飯具をぎっしりにつくりゐて

松原 弘子

帽子の吾子は準備万端

同

時差忘れテレビ観戦月白く

斎藤 靖 男

指揮棒踊りクライマックス

同

変身の鬼が立ち舞ふ紅葉狩

甫

大江山より文は届かず

碧

ほろ酔ひが相合傘をそつと貸し

甫

こちらが先とポルシェ寄り来る

碧

見つめ合ふ澄みし瞳のひたむきに

雪降り続く難民の村

凛々とロンリーウルフ月に吠ゆ

暮仇迎へ入れ齒かみしめ

秀吉の夢叶へたる黄金茶室

永き日つもり千年紀くる

車窓より散りこむ花を肩に受け

遠く煙れる清明の雨

子 同 碧 男 子 甫 碧 男

平成十一年六月十六日 首尾
於 神田分教場連句会

牛鳴いて

宮川 恍子 捌

牛鳴いて山ぼくちにも響きけり

杉山 寿子

昼月残る高原の風

細川 研三

パーティーの秋拾など選ぶらん

伴野 末季

可愛く出来たりボンフラワー

長谷川 芳子

岩彩の細筆四・五本転りて

同

氷柱の剣を食べる学童

寿

去年今年土蔵の扉よく開き

同

はやりにはやる美男美容師

三

好むまま輪廻の恋の縫れ合ふ

芳

息ひそやかな深き眠りに

寿

いっ国者戦後の自由大嫌ひ

ウイスキーより焼酎の割り

ぬえつぐみ無気味な笛で月の陰

老母送り出す語り部の会

ドラゴンス尾張名古屋に活力を

メガフォン振れば虻も応援

御幣より賜ふ幸せ花に満つ

磯を香らせ和布干す人

季

三

季

同

芳

寿

子

芳

宮
川
恍

平成十一年九月二十二日 首尾
於 熱田 山田歌子邸

朔太郎忌

百武 冬乃 捌

眼葉や朔太郎忌の窓ゆがみ

单袴の畳紙解く頃

野草展親しき友と連立ちて

横断歩道片手振りつつ

ヘリコプターホバリングする昼の月

根釣の人のひそむ岩陰

民^ウ宿の前庭広し木豈豆干す

臍眩し若き嫂

嘘に嘘重ねた末のトゥルーラヴ

遠近法のしかと油彩画

百武 冬乃

島村 暁巳

木村 真呂

有田 佳実

副島 久美子

松本 碧

実

巳

碧

久

貴婦人号磨き抜かれて町起し

頑固一徹鵠を守る

寒の月五体投地は肅々と

シタール鳴らす山麓の市

乾肉を酒の肴に旅遙か

橋のたもとで消える逃水

花の冷え質屋の土間の夕まぐれ

野良の家族の仔猫抱きあげ

平成十一年五月十二日 首尾

於 池袋 滝沢

実 呂 碧 巳 呂 巳 呂 碧

麦の秋

山田喜美枝 捌

走る子の見えつかくれつ麦の秋

風に吹かるる蛇の脱殻

新居にて挨拶状を書くならん

おみやげにするかしを選びぬ

霧流る月の入江に舳ひ舟

瓜くれなひの色なさまざま

パスポート更新すますそぞろ寒

シェフめざしつつ洗ふ大鍋

若き僧恋に悩める庫裡の隅

振り袖のした手と手重ねる

山田喜美枝

吉村ゑみこ

河原千寿子

枝

ゑ

子

枝

ゑ

子

枝

銀盆にのる雪うさぎ月あかり

望遠鏡で見えし氷壁

コソボ地区平和なくらし夢見つつ

日の丸弁当知らぬ若者

藪医者に通ひながらも全快し

大の字になる座敷うららか

ビル街の空長方形花朧

たたみ鯛で地酒一献

子 魚 枝 魚 子 枝 魚 子

平成十一年六月二日 起首
平成十一年六月二十日 満尾

表合せ

秋元 正江 捌

雪嶺を渡る鹿教湯の月蒼し

秋元 正江

屋根付橋の水烟る頃

橘 文子

病みてなほ玉の肌の清らかに

倉本 路子

抱く仔猫は愛の守護神

文

源氏絵巻繙きをれば花吹雪

江

新世紀待つ春興の杯

路

平成十一年二月二十二日 首尾
於 千寿の郷

平成十一年立机百韻より

末茂れ翁ゆかりの松五本

初蜩の音を運ぶ風

平成十一年立机祝吟

春光の溢るるばかり松五本

東
明
雅

秋
元
正
江

秋
元
正
江

平成十一年二月吉日

ソネット

葉柳

葉柳やこの世愛すべきものばかり

子ら群れてをり夕暮の虹

回廊に東方の使者平伏して

金銀錦うづたかきかな

バツイチも勲章として嫁ぎゆく

三代継を厭ふ晩春

モノレール浜松町はぼたん雪

笠を払へば花の曙

浅賀 淑代 捌

浅賀 淑代

坂本 統一

おおたけんのすけ

小林 みちを

け

菊池 みつる

同

け

美男なる仏陀の坐す夢の御座

たはむれに飼ふ鸚鵡さわがし

狼の遠吠を聞く谷深く

おそれなしたか森のプーさん

いざよひの小走りにくる誰を待つや

温め酒に円座朗らか

平成十一年五月二十八日 首尾
於 多摩市「ゆう桜ヶ丘」

を 代 一 一 を る

◇
百
韻
◇

遊ばむや

竹迷日詩囊叩きて遊ばむや

愛の鞭振るお捌きの汗

窓広し卯浪さ浪を目の下に

外国船を描くクレパス

カチカチと時計の音の響きをり

警邏の巡查交替の頃

月の道剣道防具肩に掛け

米搗ばったついと飛び出す

おくんちの阿蘭陀万才モッテコイ

宴のあとに拾ふスカーフ

美少年これ見よがしに連れ歩き

鍵を下せばしなやかな猫

孔孟の次はプラトン・ソクラテス

膝送り

橘 文子

今宮 水壺

倉本 路子

島村 暁巳

佐々木有子

篠原 達子

染谷佳之子

竹田登代子

登坂かりん

峯田 政志

長崎 和代

文

壺

インターネットで求む毒薬
襟立てて密告の人妻

千鳥ひらひら月に光りて

シャンソンを聴きつつ紫煙くゆらせる

生前葬の派手なヒロイン

てやんでえ駅の階段転げ落ち

熱海の夜の人氣なき宿

山頂のただ一本に花あふれ

よなほこりする裾を払ひぬ

二^ホ若駒の跑到に蹴きつつ抱く憂ひ

造り酒屋の軒の傾き

拡大鏡家紋見事に描きあげて

自慢のライフフル合はす照準

橋の上徐々に重なるシルエット

またあしたねと残す香水

鐘ひびく聖霊祭の果てし月

団欒の卓白布ひろげる

銀行のグラウンド買はぬ新都知事

路 巳 有 達 之 登 ん 志 代 文 壺 路 巳 有 之 達 登 ん

歌舞伎座にゆるる餅花新世紀

E

袋糶表に見せぬ指遣ひ

文

しごき課長に恨み骨髓

茹であげし芹にペンペン草まじり

新人生の返事はきはき

おぼろ月鬘を脱いで男湯に

裏道伝ひ縫れあひつつ

満席の超激辛の老麵屋

弟子の才智に抱くジェラシー

連弾のふたごのテンポ少しずれ

大あくびして犬も眠たげ

忘れごとと思ひ出したる遠花火

避暑地に独り重き庭下駄

散る合歡を鯉がばくりと池の面^{オモ}

受賞の絵本余白たくさん

フルーツの香る消しゴムコレクション

三葉虫の石がお宝

見舞客煎餅袋がさごとと

下品中品上品の恋

ディープキス雪降りつる砂防林

糺同志の春近き旅

はたはたと梢をこぼるる雀どち

砂の下ゆく定めなき川

髭づらの当らぬ八卦流行るなり

相手次第で変はるお値段

皆囃すフニクリフニクラ望の月

影絵のやうに沼太郎飛ぶ

国体^{オウ}の選手宣誓凜々と

校長先生夢でないべか

腰強き極太うどんすすり込み

たたき売りする3LDK

よい声の尻声はねる屑払

西行忌とて矢立取り出す

城跡の濠にたゆたふ花筏

トロッコ列車よぎるうららかに

平成十一年七月六日 起首

平成十一年七月二十七日 満尾

於 ウイスタリアンライフクラブ熱海

志 代 文 壺 有 達 之 巳 代 壺 文 志

新涼や

両吟

新涼や石工の磨く石の耳

月の雫を弾く葛の葉

いとど跳ぶ広げられたる地図帳に

岬の端へバスを拾って

かけ声も辞儀も似る少年野球団

ふたつつむじが番茶淹れおり

年の瀬に牛が生まるる忙しさ

トタンの屋根を霰打つ音

妄想の綾吐き続け書き続け

においの強い整髪油塗り

中卒が金の卵でありし日も

見あげてごらん星がいっぱい

三線をつまびいてみる四畳半

抱瓶腰に僧がふらりと

撫でられてうっとりとする木葉木菟

タンヤオだけで和了^{あが}するつもりが

筋のいい保守本流はたじろがず

花子演ずる傘寿翁なり

聞こえないはずの呟き聞こえて

細螺のように恋のはじかれ

きまぐれな月に捧げたスイートピー

朧の野辺に祀り果てれば

二⁺大甕にほどこされたる縄模様

空港反対説いてまわって

声高な九官鳥のごめんなさい

消えた指輪は5カラットなり

喜望峰転ばぬ先の杖をつき

ゆうべに続く白鯨の夢

風と片割月の草に寝ね

山刀研ぐ火男の背な

悪しき者正しき者も裁かるる

代 悟

ガリラヤ湖より上がる石像

この年の麦の取り入れ終わるころ

婿にとりえのないこともなく

縁先に吐き出している煙草の輪

疼きはじめる墨堤の春

啓蟄の土を踏みつつ若きは

猫の仔もらう人はいないか

二度三度腹をまさぐる聴診器

源内の目は鬼門にらまえ

きょうばかり待合酒に酔いもせず

枕の下に仕舞われしもの

アラビアン・ナイトはかくて明けにけり

オムレッツ好きは片づけが好き

ぼおーと鳴って郵便船が島にくる

秋祭には兄の雄姿を

けんかしたこのあたりには角力草

なまこ壁には月の白々

花泥棒詩のかけらをピンで留め

手櫛しながら亀なくを待つ

別^三れなり初虹たちし奏楽堂

母なる国の言葉愛しき

ちろちろと火の燃えている野営地に

紛れ込んだる軽鳧の雛

無理矢理に引き入れらるるルーレット

党首となりて初めての宴

この度は根付く気がする鳥総松

遠野の朝は雪のしずりて

久々に逢うて始まる長口舌

柳眉逆立てひかぬ有様

ブルースの女王透けゆく紅葉月

メリケン波止場灯つゆけく

読みきかす絵本を抜けてくる玉兎

同じところで拍手喝采

どくだみ茶鼻つままずに飲み干して

遅れたままの古時計の針

特高は来たかと声をひそめける

くらやみ坂に円タクを止め

男から金を引き出す算段も

くずした膝に黒子ぼちちり

猪鹿蝶猪鹿蝶とくちずさみ

小倉の山に待兼の月

鎧うべき甲冑吊りてすさまじく

MOTEL BATES 藪虱つけ

助監督カメラに併走しておりぬ

ネット社会に知命迎える

しばらくは挨拶となる帰り花

外湯めぐりか日和下駄ゆく

^ナ七厘に断腸亭のアルミ鍋

アルツハイマーなどはしらない

ゆめを食む貌に蹄はありますか

こびとの国の巨頭会談

二千円札発行の御触れ文

まがりくねって涼風は来る

竹落葉踏んで油屋までの距離

代 悟

相合傘の落書を消し

かたくなに身重を隠す妹は

ミス・ニッポンに副賞の山

端正の月は金門橋の上

琵琶を抱きし騒客の秋

西鶴忌子規忌定家忌一遍忌

壁のしみにも番付があり

^ナ寒靄の中を最終列車着く

お手玉をして笑うドクトル

気の弱いオランウータンの守り役に

水鏡には近づかぬ事

日曜のわれも絵師なり画架を立て

ダンボールからもてなしのティー

はるかなる涅槃静寂花嵐

[※]けんさりりをるかえるらのはる

※草野心平「誕生祭」より

平成十一年八月三十日 起首

平成十一年十一月三日 満尾

あ

と

が

き

第十号という節目を祝しつつお届けいたします。

麗日の三月三日、『猫蓑作品集』校正にお集りいただきました、梅田利子・桑原美津・長崎和代・八代嫺・吉藤とり子・吉村ゑみこの各氏に御礼申し上げます。

平成十二年雛の日に

下 鉢 清 子

猫養作品集 X

平成十二年四月吉日 発行

発行人 東 明 雅

発行所 猫 養 会

定価 一、八〇〇円(送料実費)

印刷所 株式会社 岩田印刷

